
活動の記録とふりかえり

Activities Documentation
and Reflection

この展覧会は、準備の段階から会期中の会場運営やワークショップ開催まで、一連の活動で多くの方の関わりがあり、場が生まれました。多様な参加とコミュニケーションが起こす変化に富むプロジェクトの運営では、活動ごとの「ふりかえり」がまた次の活動を生む重要な要素となります。ここでは活動記録の一部を紹介し、展覧会をふりかえります。

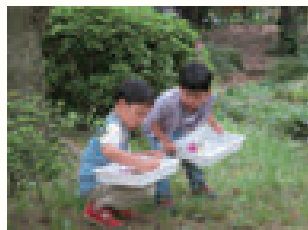
This exhibition became a space through the efforts of a large number of people who were involved in a series of activities, from the preparation stages to the running of the exhibition space during the show and the hosting of workshops. In the execution of this project, which was rich with shifts that brought about various kinds of participation and communication, “reflection” on each activity was an important element that helped foster development of subsequent activities. Here we present a portion of our documentation of the activities undertaken, and reflect on the exhibition.

■ プレ・ワークショップ

「キュッパになろう！」in 日比谷公園

2015年5月9日(土)、10日(日)

①11:00～、②13:30～、③14:30～、④15:30～



■ 《bigdatana – たなはものすみか》が完成するまでwithとびラー

2015年7月7日(火)～9日(木)、13日(月)、15日(水)、16日(木)

■ 建築家・藤原徹平 + sundiy

「キュッパのびじゅつかん」展 プレ・ワークショップ 建築編！

A:2015年7月4日(土)、5日(日) 10:00～16:00

B:2015年7月11日(土)、12日(日) 13:00～16:00

■ 開会式・特別内覧会・レセプション

2015年7月17日(金) 17:00～19:00

■ 出品作家によるプログラム キュッパる with アーティスト

1 オーシル・カンスタ・ヨンセン

「キュッパのびじゅつかん」展 + コーヒー跡→よく見て→想像して→集めて→アルバム完成！

2015年7月19日(日) 10:00～14:00

2 日比野克彦

たなからそこへ《bigdatana – たなはものすみか》&《ソコソコ想像所 - 上野の杜》

2015年7月22日(水) ①10:00～12:00、②14:00～16:00

3 小山田 徹

浮遊博物館ナイト:小山田 徹×瀧セージ トークセッション

2015年9月11日(金) 18:00～19:30

4 岩田とも子

もしも風や蝶々の足跡が落ちていたら – 自然観察と小さな標本作り –

2015年9月19日(土) 10:00～15:00

■ Museum Start あいうえの「キュッパ部」

1 国立西洋美術館 常設展:2015年8月1日(土)10:00～14:00

2 東京藝術大学大学美術館:2015年8月8日(土)10:00～14:00

3 東京国立博物館 総合文化展:2015年8月20日(木)10:00～14:00

4 東京藝術大学大学美術館:2015年8月27日(木)10:00～14:00

5 国立西洋美術館 常設展:2015年8月29日(土)10:00～14:00

6 国立科学博物館 常設展:2015年9月5日(土)10:00～14:00

■ キュッパ・ウィーク・スペシャルプログラム

1 ググラン・プレゼンツ「みつけてググラン文字さがし！」

2015年9月8日(火)～9月13日(日)13:30～17:30

2 とびラー・プレゼンツ「uwabamiによるライブペインティング」

2015年9月13日(日)10:00～17:00

■ 岐阜県×東京都美術館 連携企画

岐阜の森のスペシャリストと楽しむ「森の香り、木の魅力」+「キュッパのびじゅつかん」展

2015年9月20日(日) ①10:30～12:30、②14:00～16:00



上野公園の樹木の標本箱



図解

■ とびラー・プレゼンツ「ベビーカーツアー」

2015年9月29日(火) 11:00～12:00

《bigdatana－たなはものすみか》が完成するまで with とびらー

The Process of Making *Bigdatana – tana wa mono no sumika* with Tobira



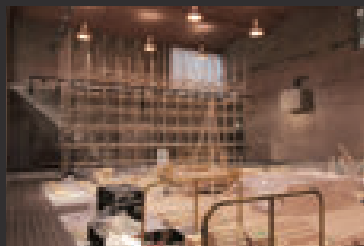
日比野克彦さんの作品《bigdatana－たなはものすみか》は、岐阜や尾鷲の美しいヒノキの森の木を使って巨大な棚が制作された後、棚の中や会場にある様々な物がとびらプロジェクトのアート・コミュニケータ「とびらー」との共同作業でインストールされ、空間が完成しました。まずは棚に陳列される箱を、日比野さんが調査した黄・黄緑・白・黒の4色のペンキで彩色し、箱本体と蓋を手作業で組み立てていきます。3日間かけて、大・小合わせて約300個の箱が完成しました。展覧会開幕直前の3日間には多数集めた「物」に関する作業が行われました。まずは棚の中にあらかじめ展示される標本



箱を作るために、物の大きさや特徴を捉えながら皆でテーマを考え分類し、70cm四方の大きな標本箱に並べ、棚の高いところに展示しても落ちてこないようにしっかりと針金で止めつけます。なかなか簡単なようで難しい作業。その後は棚の前に広がる空間に1000種類の物たちをずらりと並べ、日比野さんと一緒に並べ替えてみたり、彫刻台を出してきてその上に置いてみたり。広い展示室の空間が共同作業でどんどん変化し出来上がっていく時間は濃密かつ緊張感があり、いつもとは一味違う充実感を覚えながら、ついに完成！

《bigdatana－たなはものすみか》が立ち上がる様子

メイキング動画配信中 <http://kubbe.tobikan.jp/> (撮影・映像制作：株式会社らくだスタジオ)





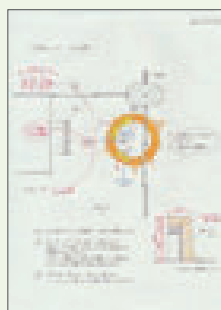
建築家・藤原徹平+sundi「キュッパのびじゅつかん」展 プレ・ワークショップ 建築編！

Pre-opening Workshop for *Kubbe Makes an Art Museum* Organized
by Architects Tepei Fujiwara & sundi -Architecture Edition

|日時| A:2015年7月4日(土)、5日(日) 10:00~16:00
B:2015年7月11日(土)、12日(日) 13:00~16:00

|対象| A:高校生~大人 B:中学生~大人

|参加人数| A:13名 B:30名



sundi によるイメージスケッチ

展示会の入口に設置するチケットカウンターをワークショップで作ろう！
ということで、会場デザインを担当した建築家の藤原徹平さんとsundi
(建築家の岡真由美さん・舞台美術家の佐々木文美さんのユニット)、そして、
公募で集まった参加者が協力して、展示会の世界観に合ったカウン
ターを制作しました。

キュッパの物語にちなみ、形は「切り株」、材料はダンボールと木材です。
参加者はまず展示会について学芸員から、会場デザインについて藤原さ
んから聞いた後、上野公園へ出かけ、公園内の木の根元の形をsundi
特製の「マコ定規」を使って採集。その形をダンボールに写し、切り取り、

本のように重ね束ねた後に、1枚1枚彩色しました。彩色に使用し
たのは「ポーターズペイント」(提供:株式会社 NENGO)という揮発性がなく、
安全性が高い、美しい発色のペンキ。色の採集・調合は上野公園内
で行い、落ち葉や木の実、枝の色を見ながら「上野公園色」が出来上
がりました。思い思いの色を選び、大人も子供も楽しそうです。
最後に彩色した束を木枠にセットし、上野公園の木の形と色でデ
ザインされたカウンターが完成！そして、展示会の入口で、展示室側
はチケットカウンター、展示室外側はチラシラックとして、展示会
の中と外をつなぐキュッパらしい不思議なカウンターになったのです。



完成したチケットカウンター



キュッパる with
アーティスト
Do It the Kubbe Way
with Artists

1 オーシル・カンスタ・ヨンセン

Åshild Kanstad Johnsen

| 日時 | 2015年7月19日(日) 10:00 ~ 14:00
| 場所 | ギャラリー A・B、アートスタディールーム
| 対象 | 中学生~大人
| 参加人数 | 40名

「キュッパのびじゅつかん」展+コーヒー跡→よく見て→想像して→集めて→アルバム完成！

Kubbe Makes an Art Museum and Coffee Stains: Observe, Imagine, Gather, and Make an Album!



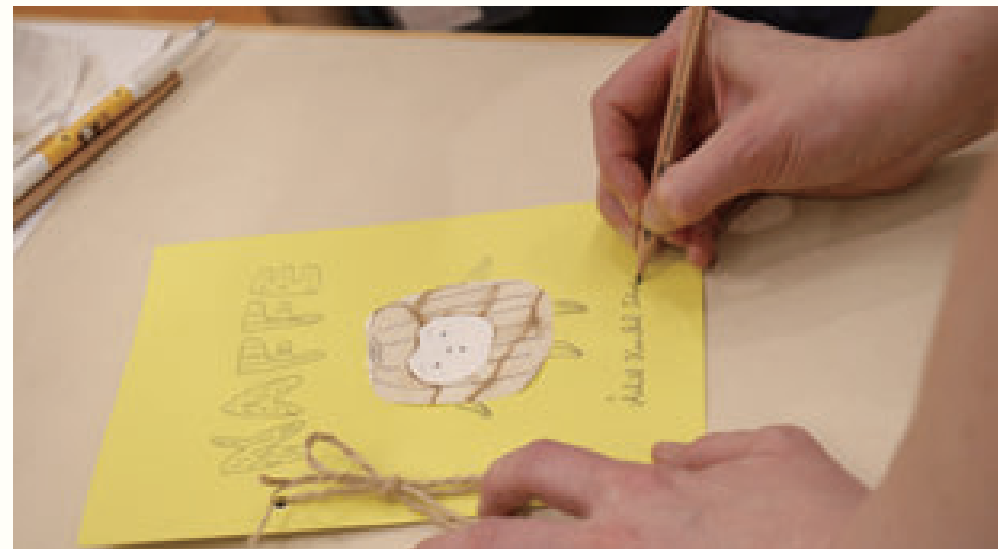
出品作家によるプログラム「キュッパる withアーティスト」第1回は、オーシル・カンスタ・ヨンセンさんによるコーヒーを使ったユニークなワークショップを行いました。このワークショップでは、普段何気なく飲んでいるコーヒーを紙の上に垂らし、そこでできた形から想像を広げて、絵を描いていくというもの。最後には、描いたものを束ねてアルバムにします。まずはオーシルさんと一緒に展覧会を鑑賞しました。日比野克彦さんの《bigdatana—たなはものすみか》での標本箱づくりでは、参加者もオーシルさんもじっくりと物を観察して、それぞれの個性あふれる標本箱が出来上がっていました。

会場からアートスタディールームへ戻ったら、コーヒーを使用したアルバム作りです。ふんわりとコーヒーの香ばしい香りが漂う中、それぞれのテーブルには紙とコーヒーが配られました。さっそく、小さなスプーンでコーヒーをすくって紙の上に垂らしてみます。コーヒーを指で広げてみたり、乾かしてからもう一度重ねて濃淡をつけたりすると、みるみる面白い形が出来上がっていききました。その後は、コーヒーでできた形の上に鉛筆で模様や顔などを描いていきます。手足や顔がついて、生命を吹き込まれ、まるで今にも動き出しそうです。制作の途中には、オーシルさんのノルウェーの



アトリエや普段の制作風景などが紹介されました。参加者のみなさんは日頃あまり見ることのできないアーティストの制作現場を熱心に、そして楽しそうに見ていました。それにしてもオーシルさん、みなさんの作品を見て回るときもコーヒーカップを手放しません。元々「オーシルさんが大のコーヒー好き」ということで立ち上がったこの企画。本当に大好きな様子がわかります。

ひとつひとつの作品をじっくり見て、感想を述べたりアドバイスをしたりと明るくお茶目なオーシルさんとの会話に、参加者のみなさんも笑顔が絶えませんでした。最後に、作った形を切り抜いて



画用紙に貼り、紐で綴じてアルバムに仕上げました。コーヒーと紙という、私たちの身近にあるものでこんなに素敵な冊子が出来上がるなんて驚きです。

コーヒーの「染み」から物語や風景を想像するこのワークショップは、普段の生活でつい忘れがちな「対象となる物をじっくり見る」こと、そして「想像力をふくらませる」ことの楽しさや大切さを思い出させてくれました。



キュッパる with
アーティスト
Do It the Kubbe Way
with Artists

2 日比野克彦 Katushiko Hibino

| 日時 | 2015年7月22日(水) ① 10:00～12:00 ② 14:00～16:00
| 場所 | ギャラリー A・C
| 対象 | 小学3年生～大人
| 参加人数 | ① 11名 ② 10名

たなからそこへ《bigdatana—たなはものすみか》&《ソコソコ想像所 - 上野の杜》

From the Shelf to the Depths: *Bigdatana—tana wa mono no sumika* and *Soko Soko Souzousho—Ueno Park*



「キュッパる with アーティスト」第2回は《bigdatana—たなはものすみか》と《ソコソコ想像所—上野の杜》、2つのインスタレーションを手がけた日比野克彦さんによるワークショップ。日比野さんの作品《bigdatana—たなはものすみか》のあるギャラリーAでは、来場者は会場に広がる物を選んで25×35cmの標本箱を作成し、展示することができますが、このワークショップでは特別に、70cm四方の大きな標本箱を作ります。

参加者は、まず3つのグループに分かれて、日比野さんから聞かれた好きな色をそれぞれのテーマに、



会場から物を集めてきます。同じ色をした物たちを大きな標本箱に集めたら、次はその中の物を色以外のグループ、形や材質などで分類します。細いグループ、四角いグループ、紙グループ、プラスチックグループ・・・。「色、形、質感、それぞれの特徴がよく見えるように、箱の中で重ならないように。」と日比野さんからのアドバイスをもらい、さらにアイデアを深めていきました。

「みつめて」「あつめて」、今度はそれらを「しらべて」みます。会場にある「キュッパのびじゅつかん・デジタル」を使って調べてみることで、物の特徴を知ったり、新たな分類を発見したりしていました。



「みつめて」「あつめて」「しらべて」きた物たちを、完成に向けて「ならべる」前に、標本箱という空間の中で、きちんと分類できているか、分類がわかりにくいのか、もう一度グループごとに検討し、物を入れ替えます。「これはこっちかな？どうかな？」と参加者同士で相談しながら、精査を重ねて出来上がった各色の標本箱。最後に分類のタグを付けて完成させました。

標本箱作りの後は、巨大な棚をのぼり、日比野さんのもうひとつの作品《ソコソコ想像所—上野の社》へ。標本箱作りで、物をよく見て、分類して、いつの間にかキュッパみたいになった参加者は、

展示している考古遺物をよく見て、スケッチをしました。スケッチを描くことで細部までよく見つけた考古遺物が、「実は〇〇かもしれない」という想像を働かせ、そのストーリーも描き加えています。最後にみんなのスケッチが発表され、ユニークな発想に笑いが起こったりしていました。同様の内容で午前と午後の合計2回ワークショップが行われ、完成した「青」「白」「赤」「黄」「緑」「黒」の合計6つの標本箱は、《bigdatana—たなはものすみか》を上ったところの收藏棚に展示されました。📖 pp.156-157



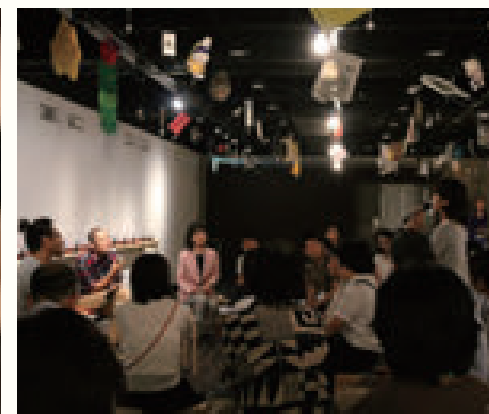
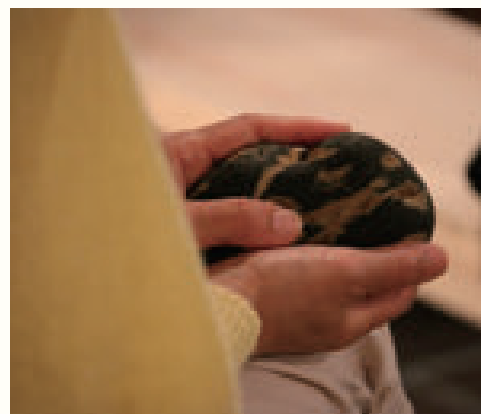
キュッパる with
アーティスト
Do It the Kubbe Way
with Artists

3 小山田 徹
Toru Koyamada

| 日時 | 2015年9月11日(金) 18:00~19:30
| 場所 | ギャラリー C
| 対象 | 小学5年生~大人
| 参加人数 | 35名

浮遊博物館ナイト：小山田 徹×瀧セージ トークセッション

Floating Museum Night: Talk Session with Toru Koyamada and Sage Taki



「キュッパる with アーティスト」の第3回は、小山田 徹さんによる「浮遊博物館ナイト」です。小山田さんが今ぜひ対談したい相手として選んだ瀧セージさんとトークセッションを行いました。本展の出品作家である小山田さんと、京都市でユニークな英語と数学の塾「岩倉英数研究会」を運営している瀧さん。意外な組み合わせで行われたこの対話では、小山田さんの作品のテーマである、多様な物の見方、現実の捉え方を様々なトピックで探っていきました。会場は閉館後の静かな展示室。小山田さんによる《浮遊博物館 2015》の解説に続いて、瀧さんからは、やかんを人に見立てる独り言英会話や、小学生が作った

美しい彩りの正弦関数のグラフ、関西弁で解く対偶証明といったユニークな勉強法が紹介され、英語や数学を学ぶことに対して私たちが持っていた先入観は軽やかに外れていくようでした。先入観を外して、面白いものを見つけ、それに自分の価値観でラベルをつけて、人に見せて楽しむことがアクティブ・ラーニングにつながるとまとめた瀧さん。最後にはキュッパのストーリーにつながるような締めくくりでトークセッションは終了しました。参加者のみなさんが終始「握り石」を握り、リラックスした表情で対話に耳をすませ、会場に親密な空気感が作られていたのが印象的でした。



キュッパる with
アーティスト
Do It the Kubbe Way
with Artists

4 岩田とも子 Tomoko Iwata

| 日時 | 2015年9月19日(土) 10:00~15:00
| 場所 | ギャラリーB、アートスタディールーム
| 対象 | 小学1年生~大人
| 参加人数 | 22名

もしも風や蝶々の足跡が落ちていたら — 自然観察と小さな標本作り —

What If You Could Find Footprints of Wind and Butterflies? – Nature Observation and Making of Small Specimens



「キュッパる with アーティスト」最終回は、岩田とも子さんと上野公園を歩いて自然物を拾い、小さな標本を作るワークショップを行いました。まずは展覧会を鑑賞し岩田さんの作品《ひろってはたどるような部屋》も鑑賞します。アートスタディールームに戻ったら、今日のテーマ「風の足跡」と「蝶々の足跡」を標本にすることについて岩田さんのお話を聞きました。自然物を集めようと思うと、ついつい地面ばかり見てしまいがちですが、時々高いところや、さらにその先の宇宙なんかも見たり想像したりしてみようというアドバイスを受け、さっそくみんなで持参した袋を手に上野公園に出かけます。



公園を歩いていると「モチノキ」がありました。「モチノキは、海の近くに植えられることが多いのですが、なぜだと思いますか？」と投げかける岩田さん。モチノキは風に強い木だからだそうです。「モチノキ」の下に落ちている物には風が通り抜けた足跡が残っているかもしれません。さらに歩いていくと、展覧会の種子と果実のコーナーにも展示されている「アオギリ」がありました。アオギリの実は熟すると船形に分かれ、風が吹くとその船のような部分がパアッと風に乗って飛んでいきます。ここにも風の足跡があるかもしれません。「クスノキ」の近くでは、岩田さんが「クスノキは



蝶々と一緒に生きている木です。」と言った瞬間、蝶々の姿が見えて歓声があがりました。実はこの木はアオスジアゲハの幼虫が食べる木なので、ここでは蝶々の足跡が見つけれられるかもしれません。上野公園をぐるっとめぐって袋に「足跡」を集めたら、いよいよ小さな標本作りです。大きい物や小さい物、みんないろいろ採ってきました。その中から「風の足跡」と「蝶々の足跡」の標本にする物をそれぞれひとつずつ選んだら、それをよく観察しながら色鉛筆で紙に描いて、絵の標本を作っていきます。自然物そのものは乾燥させないとすぐには展示室に展示することができないからです。

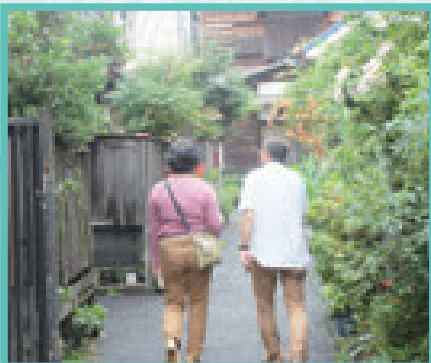


自然物そのもので作った標本は参加者がそれぞれ持ち帰りました。続いて参加者の足跡も形に残します。「足跡メモ」という紙に自分の両足の足跡をかたどり、左足の中には「風の足跡」、右足の中には「蝶々の足跡」について、発見する過程や観察を通して気づいたことなどを文章で書きました。上野公園に足跡を探しにいったみんなにも足跡があることに気づかされた工程でした。最後に、完成した絵の標本を岩田さんの作品《ひろってはたどるような部屋》の壁にみんなで展示に行きました。「足跡メモ」は一冊に綴じて、来場者の方も手に取るようにしました。

小山田 徹さん、上野で物集め

Toru Koyamada Picks Up Objects in Ueno

小山田 徹さんのインスタレーション作品では、NPO法人たいとう歴史都市研究会にご紹介いただいた一般家庭6軒からお借りした物を天井から等間隔に吊りました。「日常生活では使われず、押入れや引き出しの奥に入れられていた物をお借りしたい」という小山田さんの依頼に快くご協力いただいたのは、江戸時代から代々続くお店、明治時代からの旧家、大正時代の長屋に昭和から住むご家族、谷中生まれの戸建て住宅のご家族、谷中が気に入って店を構えたご夫婦、谷中界隈が好きで移住した新築マンションに住む若いご家族と、明治・大正・昭和・平成それぞれの年代から地域と関わっている皆様。物をお借りするために各ご家庭を巡る道中はまるでタイムトラベルをしているようでした。1軒ごとに、大切にしまわれていた物を小山田さんやスタッフの前に出していただき、物にまつわるストーリーをお伺いしていきます。ひとつひとつの物を通じて、ご家庭に流れている時間や記憶を凝縮した形で感じることができました。また、「風景収集狂舎」の名で様々なコミュニティ、共有空間の開発を行なっている小山田さんらしく、谷中・上野桜木・池之端と当館の近隣を散策する時間は、日常生活ではなかなか気がつかないような風景を小山田さんならではの視点で切り取る「風景収集」の時間でもありました。



Museum Start あいうえの
「キュッパ部」

Museum Start iUeno: Kubbe Club



国立西洋美術館
東京藝術大学美術館
東京国立博物館
国立科学博物館



「キュッパ部」は、上野公園の文化施設が連携して子供たちのミュージアム・デビューを応援する「Museum Start あいうえの」のファミリープログラムの一環として行われました。「キュッパのびじゅつかん」展を導入とし、キュッパのように、世界をクリエイティブに見る練習をした後で、もうひとつのミュージアムに行き、そこで大切にされてきた物をじっくり観察し、自分だけの発見をします。午前は保護者も子供も本展を体験。子供たちにはとびらーが伴走し、参加型の一連の体験をサポートしました。保護者には本展の背景である「Museum Start あいうえの」や「とびらプロジェクト」といった事業内容を説明し、展示室では担当学芸員がギャラリートークも行い、じっくりと作品を鑑賞してもらいました。子供と保護者が本展での体験を通じて、物をクリエイティブに見ることに



慣れたところで、午後はまだひとつのミュージアムでの活動です。午後の活動にあたっては、各回それぞれのミュージアムの展示の特性にあわせた鑑賞・観察のテーマを設定し、ツールとして、「Museum Start あいうえの」の冒険のツール「ビビハドトカダブック」を使いました。例えば、東京国立博物館の回では、「1000年後の未来に伝えたい作品を探してこよう」という活動テーマに基づき、子供たちは発見したことや気になったことなどをメモやスケッチ。自分の体験を「ビビハドトカダブック」に記録しながら、鑑賞活動を行いました。また、作品を選んだ理由をグループで発表しあう時間を作ることで、自分の視点と他者の視点を共有する活動も取り入れました。



国立西洋美術館 常設展



東京藝術大学大学美術館「うらめしや〜、冥土のみやげ」展



03

コラム

Column

絵本『キュッパのはくぶつかん』 豊作くん、朗読収録の様子

Recording of Hosaku Reading the Picture Book
Kubbe Makes a Museum for the Video

最初の展示室、映像でみる絵本『キュッパのはくぶつかん』では、キュッパの物語を通して、大人の人にも子供の頃のワクワクした気持ちを思い出してほしい。そのためには朗読するのは大人ではなく子供の方が魅力的なのではと、白羽の矢が立った当時9歳の景山豊作くん。朗読をすることなんて初めてと緊張した様子でしたが、美術館でのレコーディングはスムーズに進みました。キュッパのおばあちゃんが話すシーンではすっかりおばあちゃんになり切って、キュッパの自慢げな「マカロ〜ニ」の声はなんと愛くるしく、記憶に残るような音声が入録されました。



物を見つめて、物の価値を編み直す

Observing Objects and Redefining Their Values

熊谷香寿美（東京都美術館 学芸員）

Kazumi Kumagai, Assistant Curator, Tokyo Metropolitan Art Museum

日比野克彦《bigdatana—たなはものすみか》の巨大な棚に納められた箱の中や展示室の中にずらりと並んだ多種多様な物たち。これらの物は、主にミュージアム・エデュケーション・プランナーの大月ヒロ子氏によって集められた。大月氏は家庭や工場などにある不用品や廃材を新たな視点で見つけ、クリエイティブな活動につなげる「クリエイティブリユース」の活動に取り組んでいる。今回集められた物は、大月氏の活動拠点である岡山県倉敷市玉島地域の家庭や、地場産業の工場などで使われていた物も多い。また、上野公園の9つのミュージアムの連携事業「Museum Start あいうえの」の各館で使われていた物、例えば東京文化会館で使われていた特殊な舞台用ライト、東京国立博物館の保存修復室長が使っていた道具、国立科学博物館の研究者の手元にあった計器などが、2015年3月から展覧会開幕の直前まで当館に続々と集められた。物たちは計測され「キュッパのびじゅつかん・デジタル」の台帳に記載され、棚の前の空間に並べられ、参加者はそれをじっくりと見つめ、集め、調べ、「ミュージアム・ボックス」に並べ、《bigdatana—たなはものすみか》の中に展示していったのである。

実は、大月氏と当館が協働して不用になった物を見つけ、それを創造的に使う活動は、アート・コミュニケーション事業の一環として数年にわたり行われてきた。まず、2012年に上野や谷中地域の廃材を紹介する教育ツール「廃材カード」を作成した。この活動は、当館と東京藝術大学が連携して行っている「とびらプロジェクト」のアート・コミュニケーター（とびら）と共に当館近隣の谷中界隈の内装屋、畳屋、日本画材屋、筆屋、桶屋、額屋、鞆工場などを訪ね、廃材をいただき、それをとびらたちの視点で選び、並べ、撮影するという手順で進められ、最終的にカラフルで美しい「廃材カード」と廃材を頂戴した地域のものづくりの場所のデータベースが生まれた。続いて、2013年と2014年には「Museum Start あいうえの」のプログラムとして、クリエイティブリユースをテーマとしたワークショップを行った。「ものをよく見て想像力を働かせ、新しい世界に出会う」というこの展覧会のテーマとも通ずる活動は約3年に渡って実践されてきたのである。

本展で集められた物は、大月氏監修の物が約800種、大月氏との関わりも長くクリエイティブリユースの活動を推進する株式会社ナカダイが収集した物が約300種、加えてとびらが収集した物やスタッフの知人が集めた物、本展出品作家である岩田とも子氏が滞在していた香川県三豊市粟島の住民が集めた物などが約600種であった。玉島や粟島の地域コミュニティ、上野のミュージアム・コミュニティなど、たくさんのコミュニティの方々に関わりを持ってもらえたことで最終的に合計約1700種ものキュッパの物語にも似合う魅力的な物を収集することができた。こうした多様な背景を持つ物たちが一斉に並べられた展示室は、様々なコミュニティならではの価値を持った物が「キュッパのびじゅつかん」というストーリーのもとに集まり、鑑賞者の視点によってさらにその物の価値が編み直される空間であったといえよう。

参考：大月ヒロ子他『クリエイティブリユース 廃材と循環するモノ・コト・ヒト』（2013年、millegraph 発行）クリエイティブリユースについて世界の事例を含め紹介されている書籍。「とびらプロジェクト」での取り組みを紹介した「とびらプロジェクト オープン・レクチャー vol.1」の様子も収録されている。



ものとの対話をもっと豊かに 「キュッパのびじゅつかん・デジタル」

Kubbe Makes an Art Museum DIGITAL:
Facilitating Dialogue Between People and Objects

丸川雄三

(国立情報学研究所 客員准教授／国立民族学博物館 准教授)

Yuzo Marukawa, Visiting Associate Professor, National Institute of Informatics;
Associate Professor, National Museum of Ethnology

あつめるって何だろう、という素朴な問いかけから始まった展覧会「キュッパのびじゅつかん」には、会場に足を運んだ人々が、自らコレクションを創作する楽しみを味わうことができる参加型の作品が用意されていました。日比野克彦氏の《bigdatana—たなはものすみか》が設置された空間には、ボタンや端切れ、使わなくなった電気製品から電子部品、木の実や枝まで1000種類以上にのぼる数々の形あるものが並べられ、来場者は、まるで自分が主人公のキュッパになったような気分で、自分の気に入ったものを集め、箱の中に自分の「美術館」(ミュージアム・ボックス)を作ることができました。

ヒノキで作られた高さ8メートルを超える《bigdatana—たなはものすみか》に見守られながら、来場者は展示室いっぱいに並べられたものたちを眺め、手に取り、選び、箱に分類し並べる作業を通じて、静かで豊かなものとの対話の時間を過ごします。展示台の上に並んでいるのは、普段は見過ごしてしまいそうな何でも無いものたちです。その特徴をとらえ、集め、コレクションとして題名を付けることで、そこに多くの新しい価値が生み出されました。

「キュッパのびじゅつかん・デジタル」

この参加型の展示では、会場でものとふれあいよく観察することはできますが、そのものの名称や、以前どのようなコレクションに取り上げられたかというような関連する事柄はわかりません。そこでそのような調べものを支援するデジタルビューアを用意することにしました。

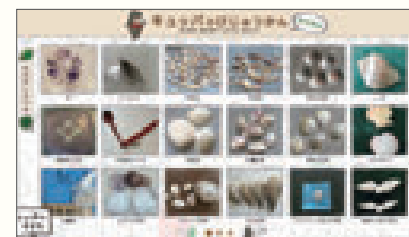
「キュッパのびじゅつかん・デジタル」は、会場に並んでいる1000種類のもの写真と



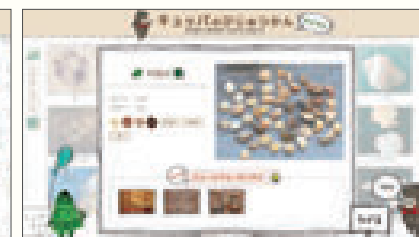
(図1)「キュッパのびじゅつかん・デジタル」トップ

名前を調べることができるいわば電子図録です(図1)。手に取ったものの特徴を手がかりに、タッチパネル式の画面を操作して直感的に探することができます。例えば、貝殻が付いているものについて調べる場合は、素材の「貝」を選択することで、結果を一覧で確認し(図2)、さらにものの詳細を確認することができます(図3)。その他にも「金色でまるいもの」ばかりを探すこともできます。また、「みんなのミュージアム・ボックス」では、他の人たちのコレクションを見ることもできます。

ものを選別し集めていく合間に「これなんだろう」と感じたならば、この「キュッパのびじゅつかん・デジタル」で調べることができます(次ページ写真)。65インチの大きな画面の1台は、立ったまま気軽に使うことができます。グループでの利用にも向いており、他の人が使っている様子を横から眺めることもできます。しっかり腰を据えて調べたい人には、椅子に座って操作できる27インチモニタの端末を用意しました。操作はどちらもタッチパネル式で、スマホのアプリのような感覚で使うことができます。



(図2) 素材が「貝」のものの一覧



(図3)「貝殻」の詳細と関連するミュージアム・ボックス

デジタルビューアが目指したもの

みつめて、あつめて、しらべて、ならべて、そして最後に分類名と説明をつける行為は、ミュージアムにおける仕事の一部を模しているとも言えます。ミュージアムの役割は、標本資料や作品を収集し安全に保管することですが、いずれの作品をどのような考えのもとに集めるか、という点がとても重要です。そのため学芸員はミュージアムにふさわしい資料や作品かどうか、よく観察するとともに、関連する調査や研究を十分に行います。

「キュッパのびじゅつかん・デジタル」では、気になるものをよく観察した上で、まるで図鑑のようにそのものの名前を調べ、類似する他のものを知ることができます。また、それと同じものが収められた他の人のコレクションと題名を、写真で見ることでもあります。思いがけず小さなミュージアムの学芸員となった来場者に、調査や研究を擬似的に体験してもらうことによって、より一層、ものを見つめ、集め、並べる世界に没入できることを目指しました。

システムデザインにあたっては、企画展と《bigdatana—たなはものすみか》の世界観に合わせて、来場者が主体の体験となるよう配慮しました。具体的には、キュッパとその仲間たちの力も借りつつ、感性的な検索語や直感的なタッチパネル方式、高信頼で反応の良いインタフェースを重要な機能と位置づけて開発し組み込みました。また、来場者が作った「ミュージアム・ボックス」をあわせて取り込むようにしたことも大きな決断でした。

来場者の「ミュージアム・ボックス」は、しばらく会場に置かれたのち、やがてバックヤードにそっと運ばれて、分類を解かれてしまいます。その作業を行う部屋に、カメラと照明台からなるシステ

ムを導入し、1日に10点程度の「ミュージアム・ボックス」を記録するようにしました(写真)。記録はクラウド経由で会場外の担当者に届けられ、データベースに登録され、翌日には会場の端末で見ることができるようになりました。

このしくみによって、来場者はこれまでに作られた「ミュージアム・ボックス」も参考にしながら、「私の美術館」づくりを楽しむことができるようになりました。時間を超えて来場者同士が影響を及ぼしあう新たな「つながり」を設けることにより、日比野克彦氏のインスタレーションとの一体感をより強く感じられる検索システムを実現することができたのではないかと考えています。

「キュッパのびじゅつかん・デジタル」のウェブ公開

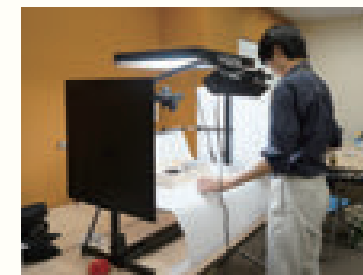
「キュッパのびじゅつかん・デジタル」は、会期終了とともに役目を終えましたが、展示のアーカイブズ(記録)として、インターネット上で公開していきます。

ミュージアムにおいて、来場者と展示との関係はそれを提供する側と鑑賞する側という一方的な形になりがちです。「キュッパのびじゅつかん」は、そのような展示空間内で固定化された関係を揺さぶる企画展でした。美術館とは、空間や「もの」とのインタラクションを通じて、見る側の創造性を豊かに引き出す場であることに改めて気づかれます。この「キュッパのびじゅつかん・デジタル」ウェブ版では、「みつめて、あつめて、しらべて、ならべて」という行為を通じた来場者の、普段は目に見えづらいバラエティに富んだ創造性の一端をご覧いただけます。展示されたアーティストの作品やコレクションとともに、鑑賞という行為の未だ見ぬ可能性と広がりを伝えられればと考えています。

※「キュッパのびじゅつかん・デジタル」は特設ウェブサイト (<http://kubbe.tobikan.jp>)に掲載

謝辞

「キュッパのびじゅつかん・デジタル」は、東京都美術館と国立情報学研究所が共同研究として取り組み実現したものです。この場を借りて関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。またインタフェースのデザインと実装を担当した株式会社シーリオの中原祐輔氏と、データベースなどバックエンドシステムの構築を担当した株式会社システムモメンツの花輪和孝氏、会期中「ミュージアム・ボックス」の記録とデータベースへの登録に協力してくださった多くの方々に、深く感謝いたします。



「ミュージアム・ボックス」の記録風景

展示場の様子

- (上) 65インチと27インチの端末を設置
- (中) ものとふれあいながらの調べもの
- (下) タッチパネルで「そらいろ」のものをさがしてみる


みんなが作った ミュージアム・ ボックス

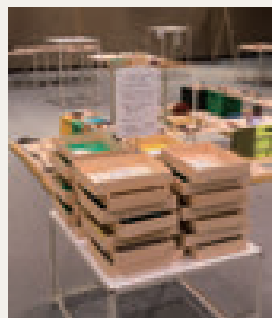
Museum Specimen Boxes
Made by Visitors

凡例:  年齢 「タイトル」
解説 _____
_____ (ニックネーム)

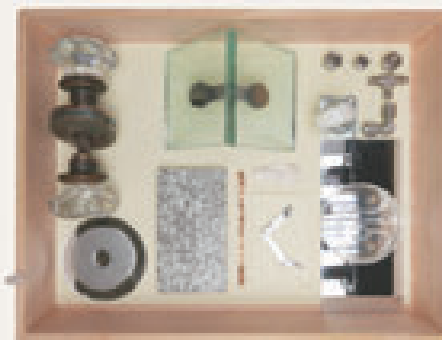
※ タイトル、解説、ニックネームはタグに書かれた原文のまま掲載した
標本箱のサイズ: 330 × 250 × 55mm




 小学1~3年生 「しよくぶつチーム」
いちばん下はまつぼっくりチーム つぎはくろみチームとどんぐりチームです (はるか)




ここでは《bigdatana - たなはものすみか》のヒノキの棚に収められた「ミュージアム・ボックス」の中から、いくつかを紹介します。来場者はギャラリーAの中央に積まれたヒノキの箱(左写真)を手に取り、掲示されていた「HIBINOからの5つの指令」(p.160)をよく読んで、世界でひとつだけの「ミュージアム・ボックス」を作りました。会期中に作られたその数はなんと計19935個。「ミュージアム・ボックス」を作るポイントは、物をじっくり見て、物と物の共通点を見つけて仲間をつくり、分類名を考えること。タグに書かれたタイトルがその分類名になります。みなさんがどのような分類を考え、物を並べているか、ぜひじっくり見てください。




 おとな 「ピカピカリ」
めぐっていると光がみえることがあります。ピカリとしたものをそろえました。(齊藤陽道)




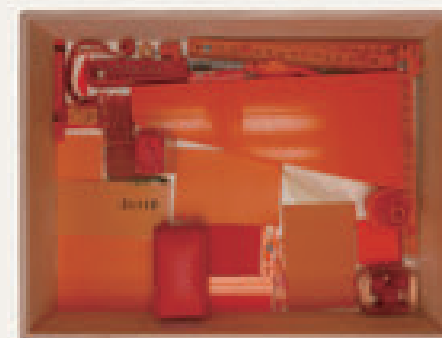
 小学4~6年生 「すきとうのもの」
はんたいがわがみえてかたい。(まさと)




 小学4~6年生 「青から水色へ」
箱の中から右から左へと色がうすくなっていくところ。(なつ)




 おとな 「Things made of wood」
Things in the box are mostly wood, or Household stuffs, equipments that are made of wood.(未記入)



 おとな 「体温」
1つ1つでは関係ないけど集めていくうちにヒートアップして温度が上がってきちゃいました。(ささきりょう)



 おとな 「つなぐもの」
つなげて引っぱり つなげて下げたり つなげて築いたりして来たものたち(さん)



📋 小学1~3年生 「き金族るいの箱」
金、銀、銅の色の物たちをあつめました。(ななえ)



📋 おとな 「One thing in common…」
All the objects are very different, but in each group they have one thing in common- their colour! People are similar- they may all seem very different, but if you search enough you will find something in common with everyone you meet ☺
(Sarah セーラ)



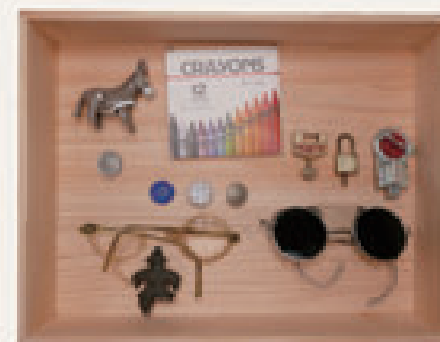
📋 おとな 「長いものたち」
いろいろな材質の長いものを順番に(ひでさん)



📋 おとな 「背比べ」
人は歳と共に成長するけど、筆たちは、時間と共に短くなっていく……(えみさん)



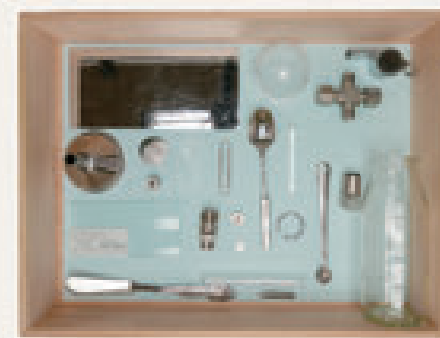
📋 おとな 「房ふさ」
植物の房を集めていたら、形が似ていてふさふさしたもので集まってしまった。(さくら)



📋 おとな 「かけるモノ」
書ける、掛ける、賭ける、駆ける、欠ける(うまん)



📋 小学1~3年生 「デンチとでんきゅう」
トーマス・エジソンがはつめいたものです。(Asuka)



📋 おとな 「色のない世界」
色を持たない物達を集めてみました。この箱の中では、人が映る、または手に取って初めて色を有します。(Natsumi)



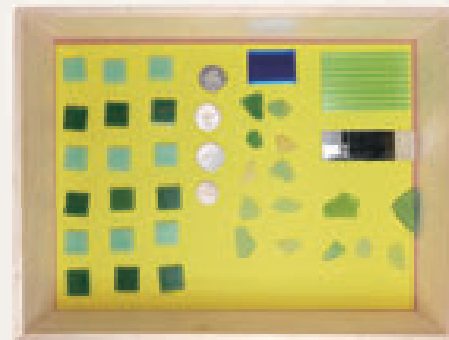
📋 おとな 「木のできているモノ」
材料が木又は木を使っているモノを集めました。なんとなく、ほっこり☺(みー)



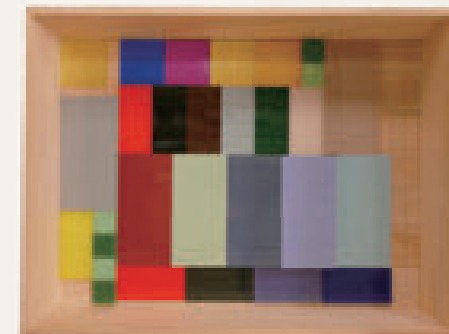
おとな (しいさん)



未記入 「しましま SHIMA SHIMA」
いろいろな素材のしましま。長い固いのしましま。(未記入)



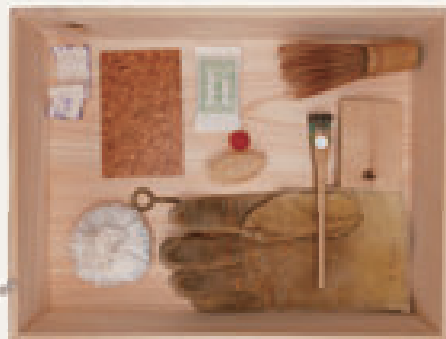
小学1~3年生 「ひかるなかま」
キラキラをあつめてたら、いつのまにかほとんどみどりいろ！（あさかまな）



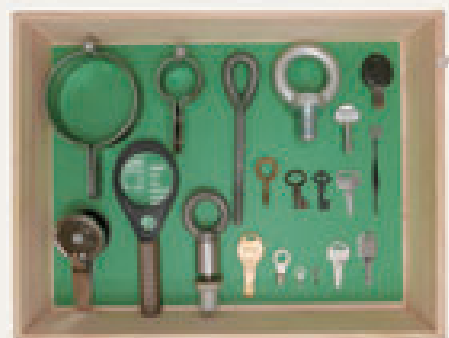
小学4~6年生 「タイル」
タイルを集めてつくった。ペラペラのビニールも少しつかった。(まれ)



中学生 「ねじ類」
↑←こういう形をしている。先に↑←これがついているモノとそうでないのがあった！！（作者）



おとな 「においのするもの」
材料のにおい、使った人のにおい、場所のにおい…想像して、かいてみて！！（ニッコウフレアイ）



おとな 「『Q』です」
「Q」の物品。いっしょに収集します。(馬崇舜)



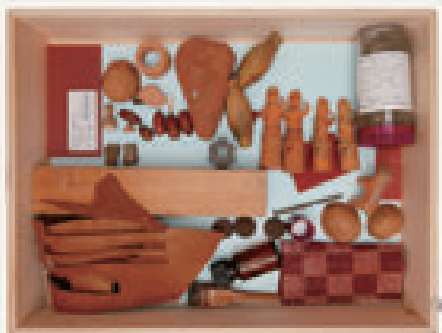
小学1~3年生 「つるつるのもの」
いしやこまとかまめでんきゅうとコルク、あと虫めがねにプラスチックドライバーにきって、あとボルトつるつるをみている(そうた)



おとな 「STUDY of TIME」
時間の経過による、色やかたち、質感の変化、その美しさ(Hideon)



おとな 「Uなんです。私。」
Uは何かと何かをくっつける仕事をしています。きっと。YouのためのUでありたい。(ちびかく)



小学1~3年生 「つち色の物」
はにわや、ぬのきれをたくさん集めたのがいっぱいになった(未記入)



小学1~3年生 「いろんな石」
石をいっぱいあつめたらきれいになるとおもったからならべてみました。(なし)

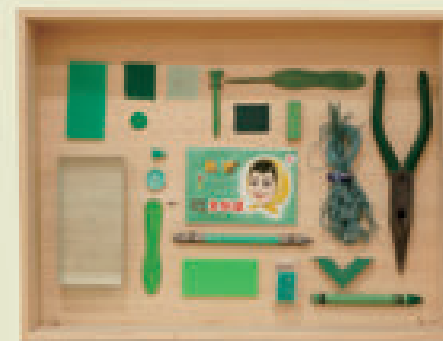
オーシル・カンスタ・ヨンセン氏がキュッパとググランの色のイメージで制作した標本箱



一般来場者にまじって標本箱を制作するオーシル・カンスタ・ヨンセン氏



「Brown like KUBBE」
Brown
Character of mine
Lives in the forest
(Åshild Kanstad Johnsen)



「Midori/Green like Guguran/Epicéa/Gran」
Midori/Green/Grønn
Character of mine
Lives in the forest
(Åshild Kanstad Johnsen)

出品作家によるプログラム「キュッパる with アーティスト 2 日比野克彦」で制作された標本箱

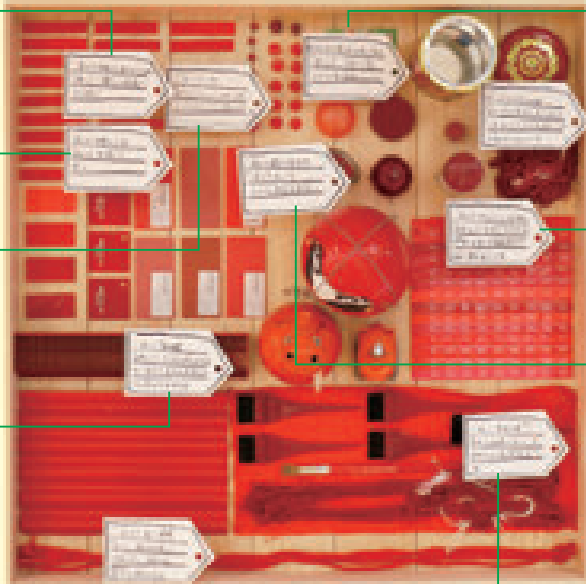
これらの標本箱は会期中に《bigdatana—たなはものすみか》をのぼったところの収蔵棚に展示されました（標本箱サイズ：700×700×80mm）

赤くて四角くて固くて
とうめい／赤い・固い・
四角い・とうめい

赤くて四角くいⅡ／
赤くて四角くて固い

赤くて丸い物／赤く、丸
くなっていて、全部洋服
にくっつけられそうな
物。あとはかたくツル
ツルしている物やザラッ
としている物もある

赤くて「ふしぎ」／赤く
て、じつような物や、
使えて、変えられる（へ
んしん系）ようなもの！



赤くて長いひも／赤
い・長さが長い・やわら
かい・結べる。（結べば）
長さが短くなる

赤い色ぬり係／赤くて、
細長くなっている！ぜん
ぶ毛が生えている

赤くて上から見ると丸
いもの／赤くてつるつ
るしているもの

赤くてじつような物／
上から見ると丸くなっ
ている。ふだんの生活
でつかえるようになって
いる。

赤くてベラッとしてい
る（紙）／赤くて長細い
ものや四角い物。色の
名前などが細かく書か
れている。

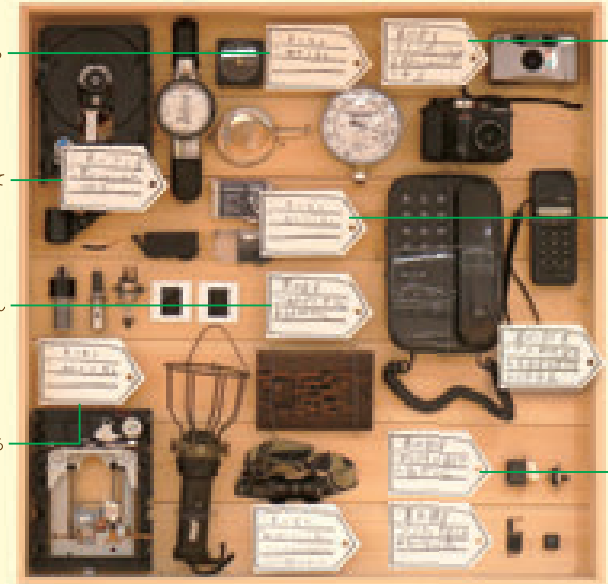
赤くて遊べるもの／赤
くて丸くて上からみる
とまるい

黒の見る／数字を見る

黒のさく／布がとれて
しまったスピーカー

黒のおす／いえのげん
かんにあるよびりん。

黒の見る／あかりで見る



黒のおす／カメラは、
シャッターをおすとシャ
シヤンが、とれる

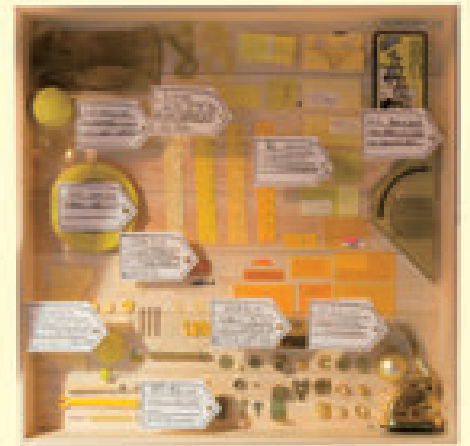
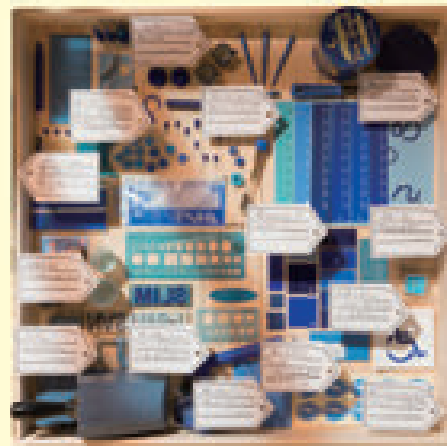
黒の見る／色をつけて
見る

黒のおす／でんわは、
ぼたんをおすとかけた人
にかかる。

黒のおす／すいっちを
おすとでん気がつく。

黒の見る／幅の広いゴ
ムで頭にくりつける
ヘッドライト。ライトの
部分は小さめ…

黒のおす／パソコンのす
いっちみたいなもの。



物の声を聴き、

物同士の語り合いに聴き入る

Listen to the Objects and the Conversation Between Them

佐伯 胖 (認知心理学者 / 東京大学 名誉教授)

Yutaka Saeki, Cognitive Psychologist; Professor Emeritus, the University of Tokyo

2015年10月に、孫たち4人(2歳、6歳、7歳、9歳)とそれぞれの両親4人を引き連れて、「キュッパのびじゅつかん」展に行ってきました。みんな大興奮で展示を見て回ったり、日比野克彦さんの〈ソコソコ想像所〉で海底から引きあげられた貝殻のような水中考古遺物の写生をしたりもしましたが、一番楽しんだのは、〈みつめて、あつめて、しらべて、ならべて〉のギャラリーでした。

台の上に並べられた、ありとあらゆる(通常はガラクタとされる)「物たち」から目についた物を選び取って自分の木箱に並べ、それらを並び替えたりして、タイトルと解説をラベルに書いて展示棚に置いてくる、という活動です。子どもによっては、非常に慎重にじっくり時間をかけて選んだり選び直したりして、30分たっても数個しか集めていない子(9歳女児)もいれば、2歳男児は、ヒョイヒョイと次々集めて、たちまち木箱いっぱいにしてしまったり、とさまざまでした。小一時間ぐらいかけて、それぞれみな「収集」を終えて、自分の木箱の中の物をあれこれ並べ直し、試行錯誤を繰り返して、満足できるコンポジションに構成して展示する「作品」に仕立てあげるのに、みんな一苦労のようでした。

一人一人の子どもたちの活動に付き添いながら、子どもたちの活動をまとめた言葉で言い表すならば、「物の声を聴き、物同士の語り合いに聴き入る」ということに尽きるように思えました。

この会場の入り口付近の「案内板」には、次のように記されていました。

物の分類を考えて、木箱に並べ、展示しよう

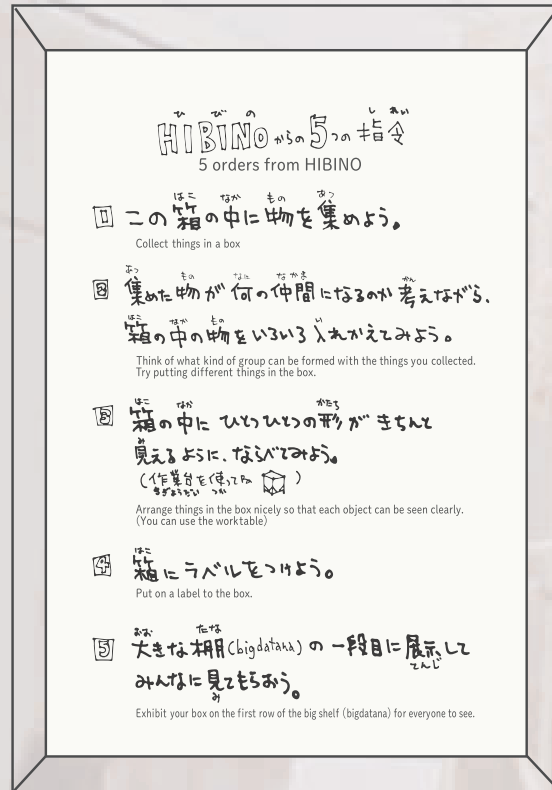
キュッパは物語の中で、まずは木や葉っぱを「収集」し「分類」をしました。そして、ラベルをつけて「展示」をしました。収集、分類、調査、展示はミュージアムの基本となる活動です。この部屋では、キュッパのように、収集、分類、展示ができます。物をよく観察して、自分の分類を考え、木箱の中にそれぞれがよく見えるように並べ、その木箱を収蔵棚に展示してください。その木箱が展示されることで他の人とアイデアをシェアすることができます。これまで誰も考えつかなかったような、あなた独自の分類を発見したり、他の人の分類を見て、また新しい考え方に気づくことができます。

やってみよう!

- ① 木箱を受け取る。
- ② 棚の前に広げられた物をよく見て、観察する。特にその物の特徴や、他の物との共通するところや違いに注目する。
- ③ 物がどんな風に分類(グループ分け)できるかを考え、分類タイトルを考え、物を集める。
- ④ 集まった物を全部机の上に並べてみて、さらに観察し、自分の考えた分類に合う物と合わない物を選別する。
- ⑤ 1つ1つの形や色がよく見えるように、箱の中に並べる。
- ⑥ 分類の意図がよくわかるように、物の並び方を変えてみたり、減らしたり、増やしたりしてみる。
- ⑦ 分類タイトルと説明のラベルを書いて木箱につける。
- ⑧ 棚に展示する。



「やってみよう!」の掲示とは別に、日比野さんによる5つの指令がありました。



ここで、「案内板」の言葉と日比野さんの「指令」とを比べてはっきりわかることは、日比野さんの「指令」には、「観察」とか、「収集」とか、「分類」とかという言葉がないことです。もちろん、「子どもにもわかるように」書き直したために、そういう言葉が消えたのかもしれませんが、私の勝手な見方からすれば、日比野さんの「指令」にはどこか「物」に寄り添う姿勢が伺われるのです。

「観察」とか、「収集」とか、「分類」ということばは、どこかヒトゴトのような、物を突き放して「眺める」、いわば「三人称的」なおいがしてなりません。しかし、子どもたちの活動に寄り添ってみると、子どもたちは物を「二人称的」に語りかけ、「物の声」を聴こうとしているようです。

そこで、「案内板」の「やってみよう!」以下を、次のように書き換えてみました。

- ① 木箱を受け取る。
- ② 棚に広げられた物一つ一つに、顔を近づけ、何か「話したがっている」ように思える物を、そっと木箱に入れてあげる。そして、木箱の中にすでに入れてあった物があれば、今入れた物とうまく話し合いができそうか、様子を見て、話が合わないようなら、それを元の場所に戻し、別の物をさがす。
- ③ 木箱の中に集まった「物たち」が、どんな話し合いができそうかを、じっくり様子を見て、場合によっては物を選び直したり、仲間同士を集めたり、並べ替えたりして、木箱(おうち、広場、劇場・・・?)の中でみんな、楽しいお話ができるように、あるいは、黙ってじっと仲良く寄り合っているようにしてあげる。
- ④ 木箱の中の「物たち」のお話や、互いが黙って寄り合う気持ちや、木箱をのぞき込む人たちによくわかるように、並び替え、位置づけ直してあげる。
- ⑤ 木箱のおうち／広場／劇場・・・に名前を付けたり、中の「物たち」のお話や寄り合いのテーマがわかってきたら、それをラベルに書いて木箱に貼る。
- ⑥ 棚に展示する。

子どもたちの「物とのかかわり」に寄り添って「案内」を言い換えると、こんな風になるのではないかと思います。子どもたちが丁寧に並び直し、位置づけ直した木箱の中の「物たち」をみると、みな、実に幸せそうに語り合い、寄り添い合っているように見えるのでした。

話は変わりますが、北イタリアのレッジョ・エミリア市は、アート活動を取り入れる幼児教育で世界的に有名ですが、そこでの教育の基本を、カルリーナ・リナルディさん(元・レッジョ・チルドレン・センターのディレクター)は、「傾聴することの教育(Pedagogy of Listening)」にあると言っています。それは、私たちがまず、子どもたちの「声」(訴え、願い)に聴き入ることを大切にすることだけでなく、子どもたちが他の子どもたち、さらには、かかわる「物たち」に、聴き入ることの大切さを強調するのです。

レッジョ・エミリア・アプローチでは、子どもたちが物と物を組み合わせて何かを作り上げるとき、接着剤や粘着テープは原則として使いません。物をじっくり見て、それぞれの物の声を聴いて、どういう風に出会いたい、どういうふう「結び合われたいか」を聴き入り、その声に即して「接合」させるのです。その結果、その「接合」をみると、本当に「物同士が結ばれている」ことが伝わってくる、みごとな接合になっているのです。

「物の声を聴き、物同士の語り合いに聴き入る」実践が、「キュッパのびじゅつかん」展をきっかけに、子どもたちの間に広がることを願っています。



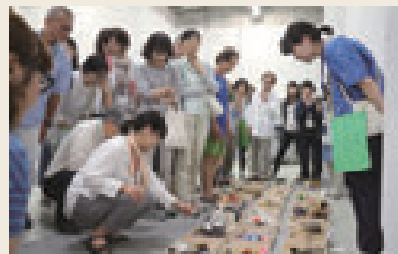
グ
グ
グ
ラ
ン
と
は
？

人と物をつなぐアート・コミュニケーター「ググラン」

Guguran, Art Communicators Who Connect People with Objects

ググランは、絵本『キュッパのはくぶつかん』に登場するキュッパと大の仲良しのモミの木です。絵本では、博物館のオープンまでの準備や片付けなどキュッパの側で手伝います。展覧会では、来場者をキュッパとみたくて、参加型作品への体験を促す役を「ググラン」と呼びました。会期中は、「ミュージアム・ボックス」の制作のサポートを中心に作品の案内などを行いました。キュッパの側で、そっと手伝いをするググランのように、今回の展覧会の「ググラン」たちも来場者に寄り添いながら、来場者の物との対話や作品との対話の場づくりを行いました。とびらプロジェクトで活動するとびらと任期を満了したとびらー、一般公募の方、合計105名のアート・コミュニケーター「ググラン」が活動しました。

募集期間：2015年6月10日(水)～6月28日(日)、7月10日(金)～7月25日(土)
研修：2015年7月11日(土)、7月16日(木)、8月2日(日) 各日 10:00～15:00
運営：認定NPO法人芸術資源開発機構(ARDA)



ググランたちはオープン前の設営中の展示室でまず展覧会のコンセプトについて話を聞き、来場者と同じように「ミュージアム・ボックス」作りなどもして、準備を進めました。実際に作ってみると「ミュージアム・ボックス」作りの考え方を理解し、わかりやすく人に伝えるのはなかなか難しい！みんなで大いに盛り上がった準備の1日でした。

ググランの1日



9:00

【朝のミーティング】



前日までの会場の様子やその日にあるプログラムなどの確認と共有をして、みんなで担当ポジションを決めます。開室までの少しの時間で、会場にある参加型作品の物をきれいに整えて来場者を迎える準備をします。



9:30

【開室】



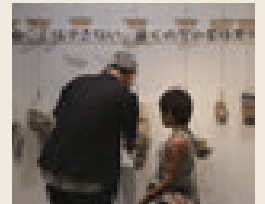
それぞれのポジションに分かれて来場者を迎えます。

《bigdatana—たなはものすみか》

参加者がキュッパのように標本箱作りができるよう伴走します。標本箱を用意したり会場の物を整えたり、展示・収蔵された標本箱の記録を行います。また巨大な棚を上る整理券の配布(1日12回)も行います。

《ソソコ想像所—上野の杜》

参加者がじっくりと考古遺物を見つめて想像力を働かせながらスケッチができるように寄り添います。



《Home for Orphaned Dishes》(忘れられた器たちの棲み家)

参加者が持ってきてくれた「一番いらない器」を受け取り(1日2回)、そのエピソードを聞き取ります。

《浮遊博物館 2015》

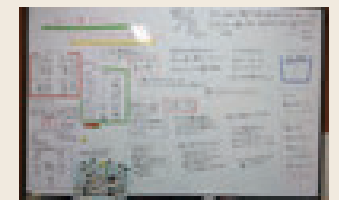
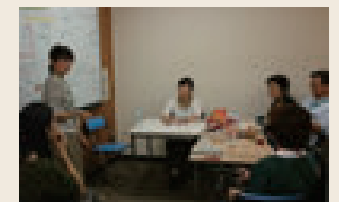
物が吊られている天井を懐中電灯で照らして見るよう促したり、握り石のあるテーブルセットで参加者がくつろげるような場作りをしたりします。

17:30

【閉室・ふりかえり】



控え室にあるホワイトボードには、その日にあったことやググランが気になったこと、来場者との素敵なエピソードなどが書かれていきます。そのホワイトボードをもとに1日どんな様子だったのかをみんなでふりかえります。その日のホワイトボードは写真に撮って、インターネット上に開設した、ググラン専用の掲示板に投稿し、スタッフ含め、全員で共有できるようにします。掲示板は、情報を共有することはもちろん、コメントを残したりアイデアを出したりして、105名のググラン同士が交流する場としていました。



ググランのつぶやき



私は定年退職後、目標探しをしていました。「キュッパのびじゅつかん」展のファシリテータとして参加して、その後の生き方に大きな影響を受けました。人と人、人と物、人と自然などの関わりにおいてのホスピタリティを発揮できる人になりたいと思って…今「東京おもちゃ美術館」で学芸員として、「ググラン」やっています♪♪

三浦茂樹

ギャラリーAのbigdatanaでは来場者のパワーに圧倒されました。大人も子どもも作業に熱中していて、ものを集め、分類し、並べる行為には、人として大事な何かが隠されているのではと思えるほどでした。「はくぶつかん」は、きっとこうやって生まれたんだろうなと。直接お声がけしてお話を伺うこともありました。そうすると、集めているものの性質や、その中にどんな法則を見つけたか、どんな風に並べているかを、とても楽しそうにお話ししてくださるんです。ある来場者の言った言葉が忘れられません。「分けるから分かる。分かるから分けられるんです。分類は、奥深い。」ものの集合の中に自分なりの法則を見つける楽しさがあの場所には溢れていました。そしてふとギャラリーCに行くと、思い思いの石を手にじっと見入っている人がいたりする。そこでもまた、なにかぐるぐると回っている感じがするんです。みつめる、あつめる、しらべる、ならべるが、ぐるぐるぐるぐる…

越川さくら

私はもともとキュッパの絵本が好きだったので、ググランとして参加できたことはとても嬉しかったです！キュッパの世界観を1人でも多くの方と共有したい、という思いでいつも活動していました。たくさんの方とお話していく中で、もの見方が変わったり、自分の新たな一面も発見することができました！

宇野千都



「ググラン」はとても楽しい体験でした。なにしろ、案内役というより、絵本に登場するキャラクターを名乗って来場者と友達になるような役ですから。楽しみに作品を作る人がいればこちらも嬉しくなり、展示作品に戸惑う人がいれば一緒に悩みました。展覧会の人気も日増しに高まり、終了時はまさに「ごめんね、やめちゃった」気分でした。

小野寺伸二

そこにある様々な「もの」を介して、様々な「人」にふれる事ができる不思議な体験でした。人と直接話さなくても出来上がった箱の中を覗きこむだけでその人の温かなぬくもりが感じられる「もの」たち。「もの」をじっくりみつめることは自分自身をみつめることなのかもしれません。

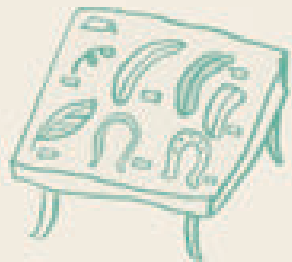
白石敦子

キュッパは、ほんとに楽しくて、よい経験でした。ほんとに子供から、大人まで、楽しめる展覧会は初めてでした。運営の大変さや、楽しさも知ることができて、わたしの人生にとって、よい時間でした。

谷下田厚子

誰かに「ねえねえ見て！」って言いたい気持ちは、子どもだけのものじゃなかったんだな。この空間に居合わせた「ググラン」だったからこそ聞くことができた、素朴な…時に情熱的な言葉の数々。人見知りだったはずが、「ねえねえ聞かせて！」っていう気持ちで、思わず近寄っていく私がありました。

中嶋加寿子



アート・コミュニケータによる企画プログラム

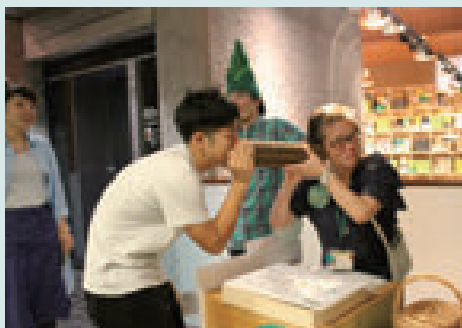
Programs Organized by Art Communicators

東京都美術館で活動しているとびラー、また展示会場内で活動した
ググランたちによって、3つのプログラムが企画・実施されました。

キュッパ・ウィーク・スペシャルプログラム ググラン・プレゼンツ「みつけてググラン 文字さがし！」

|日時| 2015年9月8日(火)～13日(日)
各日13:30～17:30

「キュッパのびじゅつかん」展の4つの展示室にいる
ググランを探して、4つの文字(マ・カ・ロ・ニ)をみつ
け、つなげてできた言葉をググランステーションで教
えてくれた方に、プレゼント(マカロニ付きカード)を
差し上げました。文字をみつかる時も、プレゼン
トをあけて見るときも、来場されたみなさんとググラ
ンの笑顔がたくさん生まれるプログラムとなりました。



キュッパウィークとは？

ググランたちが、「9月8日は『キュ』と『パ』で
キュッパの日！」とつぶやいたところから、
何かイベントをしようと思った企画です。

キュッパ・ウィーク・スペシャルプログラム とびラー・プレゼンツ「uwabami によるライブペインティング」

|日時| 2015年9月13日(日) 10:00～17:00

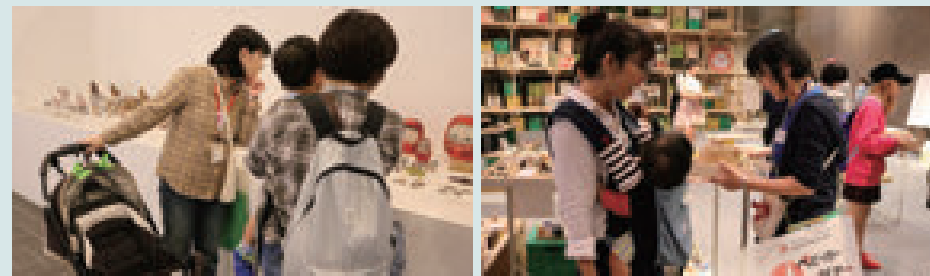
uwabamiは、制作の様子を見ている人のリクエストに応え
ながら、その場でその人を画面に登場させ、たくさんの登場
人物のストーリーをつなげて1枚絵にするオリジナル画法
「キャラストレーション」を行っているアートユニット。本展
ではギャラリーAの一角にキャンバスを立て、とびラーや多
くの来館者と様々な対話をしながら作品を完成させました。



とびラー・プレゼンツ「ベビーカーツアー」

|日時| 2015年9月29日(火) 11:00～12:00

小さなお子さんと一緒でも安心して展示会が楽しめるよう、1組に1人のとびラーが伴走し、ベビーカー
を預かったり子供に付き添ったりするなどのサポートをしながら、展示会をめぐるしました。保護者の方とは、
作品を見て感じたことや思ったことなどをお話しながら鑑賞し、《bigdatana-たなはものすみか》では、
保護者も子供も「ミュージアム・ボックス」づくりを楽しめるようにサポートしました。



絵本を参加型に発展させたこと、また、絵本の「しらべて、集めて」の楽しさを十分表現し発展させ味わえること、その発想が素晴らしいです。次回は我が家の小さい人を連れてまた来ます。(女性・60〜64歳)

岩田さんのコレクション。私もなんでも拾いますが足元にも及びません。
(未記入・65歳以上)

参加型の展覧会。美術コレクションの原点が収集、物あつめにあったことに気付かされる。美は何かではなくて、「探す」というプロセスの中で見出される、美しい大切なものである!! (男性・50代)

最初のキュッパの作者のメモやドローイング、スケッチなど。とても素敵な体験型の展示。見て、さわって、あつめて、描いて、とても楽しかったです。童心に戻りました。(女性・20代)

民博、大阪自然史博、岩手大博物館とのコラボが良かったです。大月さん、アランさんも心を打ちました。何より、小山田さんの「巡礼」は涙が出てきました。(女性・40代)

自分でものを集めるのは、自分自身を見つめる良い時間でした。(女性・20代)

ここ最近観た展示では最も恐ろしい展示。絵本だからと侮るなかれ、コンセプトが奥深い。木村兼葭堂コレクションなど持ってくるのがすごい。特に、個々に展示物を選ばせるコーナーがあったが、あれは本当に恐ろしかった。選ぶという行為自体に自分をさらけ出させてしまうようなところがあり、「箱庭療法」のような効能があるのが判って怖かった。コレクションは自分自身を映す鏡、個人的には自分は地味な人だと思っていたが、「キラキラしてアートのもの」ばかり集めている自分に驚いた。ケータイはロッカーに置いてきたので、写真を撮ることは叶わなかったが、自分がチョイスしたコレクションは非常に愛おしい。誰か代わりに写真を撮っておいてくれればいいのにとまあ、この展示は恐ろしいけれど素晴らしい。(男性・30代)

私の地元の土が展示されていて嬉しくなった。その子ひとりひとりの感性をのばすヒントをいただいたように思います。子どもに対する気持ちや接し方に活かしたいです。(女性・30代)

竹中大工道具館で同じものを見ましたが、全く違うものに見えました。同じものでも展示の仕方、企画の作り方で全く異なった側面が見えてくる事にビックリ。(男性・60〜64歳)

自分で自分の宝箱を作れたのが楽しかったです。ものって、何かの役目を持つ以前に1つの“モノ”で、それ自体を大切に愛してあげたいなあ、と思いました。(女性・20代)

日比野さんの展示。1回目に集めるのに苦戦して、他の人のやり方を見て、そんな自由でいいんだ!と発見があり、再トライ。2回目は、自分の好きな世界観や気分を再確認でき、なんだか自分の目線もゆるやかになったような気がした。

(女性・20代)

海底から引き上げたものを何なのか想像してみるなど、日頃の固くなった頭が少しは柔らかくなったようでとても楽しかったです。偶然ですが来てよかったです。(女性・50代)

こんなに何度も気になって行ったり戻ったりする展示は、とても楽しく大満足です。
(女性・40代)

来場者の感想
— アンケートより
※原文のまま掲載
Visitor Voices:
From the Visitor Questionnaire

キュッパを通して博物館とは何かを具体的に考える展示はとても面白く、「何を選ぶか」が楽しい参加型のインスタレーションも時間を忘れるほどでした。(女性・40代)

最後の小山田さんの展示が特に面白かった。テーマ的に「No Museum, No life?」展と似たところもあるが、キュッパ展は教育的でもありながら、根源的な人間のあり方にしっかりと目を向け、収集することの原始的な楽しみを改めて教えてくれた。(女性・30代)

予期せぬ展示にびっくり、感動。
(女性・65歳以上)

土の色がこんなに違っていただけで、集めてならべるとよくわかる。すばらしい。
(女性・50代)

「もの」へのまなざしのありがたさ、ものの価値は変化していく、ということ。心がゆたかになるすてきな展示でした。(女性・50代)

思った以上に熱中してしまった。

(男性・20代)

キュッパというキャラクターを通じて、個人的な収集がキュレーションにつながることを知りました。この体験を通じて、博物館、美術館をじっくり見る、考える、隣の人と話す楽しみを改めて感じました。1人で来館しましたが、スタッフの方が声をかけて下さり、話をするうちに自分の考えがまとまりました。博物館的なものと美術作品が対等な位置にあったのも良かったです。(女性・30代)

最後の展示(倉を訪れた感じで懐中電灯使用)には驚いたが、非常に自分も参加している気になれた。コミュニケーターの方との会話も楽しかった。(女性・40代)

天井から吊るしてあるものたち。いろんな時間軸上にあるものたちが同じ高さに並んでいて、おもしろかった。持ち主の人のことをいろいろ想像できた。(女性・50代)

はじめての美じゅつ館が楽しかった。(男性・10歳未満)

コレクションもアーティスト作品もワークショップもデータベースも全てがつながっていてよく理解できた。(女性・40代)

ありがとうございました。泣き出しそうになりました。ワンワンワン、と。(女性・50代)

土の収集に執念を燃やした展示。(女性・30代)

常設してほしいくらい。(男性・40代)

身の回りのものを見直す、視点を発見する、新たな価値観を見い出す、そんなきっかけになる展覧会でした。ひろう、あつめる、ならべるといふ単純な行動が連鎖して、奥深い世界を堪能できました。(男性・60〜64歳)

星は遠くなのに見えて、水中は見えないということ、見えないものに思いをはせる、ありふれたものをぞんざいに扱うのではなく、ストーリーを感じる、そんなことを忙しい日々の中に取り入れたいです。「気付き」をありがとうございます。(女性・30代)

芸術作品を集める展示会が多い中“コレクション”という表題でここまで一つの展示会ができるのがすごいなと思いました。特に印象に残ったのは、自分で箱にコレクションを作る展示。他の人の視点は違うのは当たり前なのに、決まった答えがないのが面白いなど思いました。(女性・20代)

I really like this!! It is so lovely. I have never seen this kind of exhibition. I will come again with friends, thanks!! (女性・10代)

博物館とメディアという関係性を考えさせえる面白い展示。(男性・20代)

美術館の根源的な概念の、本当に大切な部分がか伝わりました。係の方の優しい対応も嬉しかったです。(女性・20代)

そこら辺のものに夢中になっていた小さい頃を思い出した。(女性・40代)

おもしろかった。来ている方がみな参加していて楽しそうだった。日常に忘れかけていること、ものに触れて人間らしさを取り戻せる体験が心地よかった。子どもたちがいい顔をして、親も一緒に笑っていた。いいですね。ものとの関わりを改めて感じ直すことができました。(未記入・50代)

子どもの頃を思い出させる時間。社畜ライフから解放される気分です!! (男性・20代)

美術を通じて世界を発見する、子供達に伝えたいと普段漠然と考えていることを具現化してくださったような展示でした。感動しました。もっと早く来ればよかったです。(女性・30代)

思い切って北海道から日帰りで見に来た良かった!! (女性・40代)

わくわくがたくさん詰まっています、無駄なこと／ものなんてないんだなと思った。素敵な時間をすごせました。(女性・10代)

栗田さんの他の展覧会で見た作品が印象深く、日経新聞で展示中の作品があることを知り来館しました。キュッパは知らなかったのですが、今回読んでみてすごく感じ考えることがありました。コレクターではないですが、あふれるほどの自分の持ち物について改めて考える機会ができて、とても良かったです。是非、誰か他の人にも勧めたい!(男性・50代)

「忘れられた器たちのすみ家」視点がとても新しく面白かった。(女性・30代)

絵が並んでいるだけの展示かとおもいきや!さまざま視点からもの見方に気付けてくれるような素敵な展示でした。(男性・20代)

最初の展示室のビデオがとてもわかりやすかった。やっと美術館や博物館の活動内容と意味が理解できた。(女性・30代)

キュッパを切り口に美術館なのに博物館的アプローチをした作品展示が好奇心をかりたてる、素晴らしい展示でした。この気持ちを観に来た子どもたちが少しでも覚えて、楽しい気持ちを持ち続けてくれたらいい。(男性・40代)

種と土。めだかの顔。(女性・50代)

参加型の展示と最後の展示。何かをコレクションしたり石を触ったりするのはすごく久しぶりで、小学生の頃に戻ったみたいでワクワクしました。また天井から色々なものを吊っているのも、普段見慣れているものが違って見えて、とてもおもしろかったです。(女性・20代)

Kubbe was very cute, impressed. And the activity of making my own museum is absolutely GREAT.(女性・20代)

キュッパの絵本の朗読の映像から始まり、集められていたものの、集めた方それぞれの興味のベクトルが大変面白く眺めていました。最後の部屋で、懐中電灯に照らされた品々が、いつもは同じ高さで見られることがないため、逆にフワフワと奇妙な感覚。かと思えば、様々な重さ、とりどりに違う形の石。実は個性のある顔。最後の「巡礼」に行き着いた時に、今まで言葉にできない気持ちが。この子ども達の「物に、生き物に神がいる」という、何にもまだ染まり切っていないがゆえの純粋さが受け取る万物全てに対する礼賛であり、賛美であり、感動なのだ、と、ストーンと自分の中で腑に落ちました。何に対しても感動し、尊敬し、物も人も大切にしていければ本当はもっと世の中は変わるのではないかなということも思いました。(女性・40代)

So much love. So much truth. See the world with the eyes of children. Go out and explore the world! (女性・30代)

図録の始めの文章、物との関わりについての考察で、自分について振り返ることができました。ゆっくり何度でも読んでみたいと思いました。自分で構成する作業もとても楽しく、しばし時をわすれました。この夏一番の思い出となりました。(女性・50代)

上野の9つの美術館・博物館がそれぞれで、キュッパのように訪れる人を迎える活動に従事している方の思いに、図録の記事でふれることができました。(男性・40代)

アート・コミュニケーションの

これまでとこれから

Dialogue Between Katsuhiko Hibino and Sawako Inaniwa
Past and Future of Art Communication

日比野克彦

稲庭彩和子



本展の出品作家でもあり、当館と東京藝術大学が連携する「とびらプロジェクト」や「Museum Start あいうえの」の大学側の代表教員として関わってきた日比野克彦氏と、本展担当学芸員の稲庭彩和子が、共に展覧会について振り返りつつ、「アート・コミュニケーション」をテーマに対談を行いました。(対談収録日：2017年2月7日)

アート・コミュニケーションを
コンセプトにした企画展

稲庭 2012年に東京都美術館(以下、都美)はリニューアルの特色としてアート・コミュニケーション事業を立ち上げ、東京藝術大学(以下、藝大)

と連携して「とびらプロジェクト」を始めました。日比野さんは藝大側の代表教員としてプロジェクトの最初から関わっていただいて、翌年には「Museum Start あいうえの」という上野公園の9つのミュージアムが連携するプロジェクトも始めました。

日比野 そう、その頃に、稲庭さんから今後アート・コミュニケーションの学芸員が担当する展覧会を開催することになるかもしれないという話を聞いて、連携事業としてやっていることが活かされるような展覧会にできるといいね、と話していたんだよね。

稲庭 当初は「子供とデザイン」というテーマが挙がっていたのですが、「Museum Start あいうえの」でやってきたことを活かして「子供の学びとデザイン」という方向でもいいのかな、と考えていました。そんなある日、新聞の書評で絵本『キュッパのはくぶつかん』が目に入り、とても魅力的で、この物語が入口になればミュージアムがテーマでも少しは関心を持ってもらえる展覧会になるかなと思い始めて…。

日比野 稲庭さんから初めて絵本を見せてもらったときに、我々が連携を通して模索していたものの答えに近いものが展開されているなって、思ったんだよね。

稲庭 ミュージアム自体がテーマだと、概念的すぎるかなと思ったのですが、日比野さんに絵本を見せて相談したら「いいね」と言ってくださって。「上野の美術館は奥様がおしゃれをしていく場所、というようなイメージを、もっと軽やかな感じに変えるいいアイデアだと思う。」と言ってくださって。「オーシルとはもう会ったの？はやく会って話してきなよ!」と言われたんですね(笑)。

日比野 (棚が一面に描かれた絵本のページを開いて)この世界観が、《bigdatana—たなはものすみか》につながるんだけど、こういう展覧会ができたならおもしろいなって思ったし、絵本を見たときに、いけるなと感じました。この絵本って、企画書みたいになってるじゃない？普通こままでいくのにいっぱい企画書書いたり、図面に起こしたりするんだけど、これを見れば方向性とか世界観がわかるし、良く出来た本だよね。

作家の選定と《bigdatana—たなはものすみか》が生まれるまで

稲庭 上野のミュージアムには、科学や美術や動物とか色々な分野の専門家があります。「Museum Start あいうえの」を始めるときに、日比野さんが「各館で専門化している分野を子供たちと一緒に横断的に見て、今までと違う価値を見つけられたらおもしろいよね」って言われて。この展覧会では、「Museum Start あいうえの」の活動コンセプトでもある「物を見つめること」「誰かとそれを共有すること」とは一体なんだろう？というのが一番コンセプトだったので、いろんな学芸員や研究者やアーティストたちがどういう風に「物を見つめているか」ということがわかるような展示をしたいと思います。

日比野 アートって、絵を描くって、たとえば顔料はもともと石を拾ってくるわけだよね。それを粉々にして、絵具というものにする。それを使って筆でキャンパスに絵を描いていくんだけど、絵具は石であり、キャンパス地は繊維であり植物なんだよね。稲庭さんがセレクトした作家は絵具じゃなくて土や石を拾ってくるような人。絵具にしてキャンパスに塗らなくても、並べ方ひとつでさっき拾ってきた石が絵に見える。名画名品っていうものは、作品だけでは成立しなくて、作品と鑑賞者の間に起こる気持ちのゆらぎがあって初めてアートになる。そもそもコミュニケーションというものがなくてアートは成立しない。物を通しての会話というコミュニケーションがあれば石でさえひとつの作品になっていたということが発信できる展覧会を目指していたよね。

稲庭 そうですね、栗田さんの土の作品も、岩田とも子さんの貝や虫を拾ってくる作品も。日比野さんに出品をお願いするにあたっては、まず岐阜の日比野さんの倉庫へお邪魔して、倉庫でたくさん作品を見せていただきました。



そこには身近なものへの愛情が感じられる作品が多くあって、物への眼差しが、オーシルが持っている日常の身の回りの物への眼差しに近いと感じていました。

日比野 オーシルが描くキュッパの世界は、物に動きがあるよね。しまった物をまた引っぱりだしてきて並べ直して。通常の展覧会では、作品資料は陳列棚にあって、搬入してセッティングしたら搬出まで動かさない。物を動かすときも、白い手袋はめて、そーっと扱って。でもそういう世界だけがアートではなくて、物は動くんだっていう世界観を私の作品では見せたいなって思っていました。

稲庭 《bigdatana—たなはものすみか》の原案ですけれど、日比野さんが最初に提案してくださった2014年の8月のプランには、10ページくらいにわたって、スケッチが描かれていました。「SHIWAKE」(仕分け)というキーワードが書き込まれて、たくさんの物が大きな回る円卓の上に置かれていて…。この最初のスケッチから巨大な棚が存在していて、棚にはまっすぐな階段も描かれていましたよね。

日比野 棚の向こう側にもこちら側にも行き来

できて、ここにいる人たちを、あっちの人が見るといような重層性みたいなものがほしなくなって思ったんです。キュッパのように、実際に森に行つて物を集めたり、森に物を返しに行くことはできないのだけど、人や物が循環して、ワークショップのように変化している空間にはしたいな、と。ギャラリーAのあの大きい吹き抜けの空間はインパクトがあるから、とにかくそこに物がいっぱいある様子と、動いている人と物が一気に視界に飛び込んで来るっていう状況を作りたいなというのがありました。棚の前に広がる空間と棚をつなげるために、階段にこだわったのかな。

アートコミュニケータ・とびラーたちとの作業

日比野 オーシルの森だったり、棚の中の箱のイメージはすごく掴みやすかったので、実際には大変なこともあったけれど、最初から実現へのイメージは持っていました。一番最後まで心配だったのが、物が足りるんだろうかということ。オープンが近づいてきても足りるのか足りないのかがなかなか掴めない。広い



ギャラリーAの空間に並べたときにどのくらいになるのか、現場に入ってから確認するしかなかったからね。

稲庭 日比野さんから何度も「物、集まった?」と聞かれて。種や石や枝などの自然物や、ついじっくり見てしまうような見飽きない物を集めるといのがコンセプトだったので、なかなか大変で。いよいよ設営の日になって、大量の箱を組み立てたり、物を並べたりする作業もとびラーたちに声をかけて…。

日比野 あのととき集まったとびラーは20人くらい? まずは平場に整然と並べてみて、それからもう一回並べ直したりして、このときが一番スリリングだったね。整理されてるけど整理されていないというような、いい意味でプロセスの途中というような状態を作る必要があった。ある程度のところまで寸止めする。いい加減を保ちながら行ったり来たりするところを作るには、現場でワークショップやりながらでないとできなかったし、ひとりではできないので、みんなできてよかった。

稲庭 とびらプロジェクトが始まってからみんなで重ねてきた活動が、この展覧会につながっているのだと感じる時間でした。

日比野 棚にあらかじめ展示する標本箱を作るにあたって、具体的な指示の元に動くのではなく、「ふわふわ」とか「都会的」とか抽象的なキーワードで集めてもらって、とびラーたちと一緒に作っていくというプロセスがあった。僕も最終的なイメージはあるんだけど、とびラーたちとやりとりしながら、少しずつあぶりだしていくって数日間になったよね。

稲庭 設営当日まで会場に広げる1000近い物たちの展示方法が確定できないままで、日比野さんの当日の指示がどう出るか想定して、いくつかの選択肢を取れるように準備していました。最初は床に平におかれていた物たちが、備品の彫刻台を出してきて、その上にヒノキの板を敷いて、その上に物が置かれたときに一気に空間が変わりましたよね。作家が空間を変えるその瞬間をとびラーさんたちと共有できたことはよかったです。

キュッパ展のその後の展開について

稲庭 《bigdatana—たなはものすみか》のヒノキの丸材は、解体した後の一部は日比野さんが館長をされている岐阜県美術館で、また違う

作品になるという嬉しい展開がありました。

日比野 そうそう、岐阜県美術館では、「ナンヤローネ」プロジェクトを展開しています。「ナンヤローネ」は、岐阜で「なんだらうね？」の意味で。アートを見て感じたことを素直に「ナンヤローネ？」って考えてみる、このプロジェクトのひとつが「Such Such Such(あんな そんな こんな)」。これは「コネクター」と呼ばれる様々な物を使いながら作品鑑賞を楽しむのだけど、例えば熊谷守一の絵を見て、その絵の前にはコネクターである石ころが箱に置いてあって、絵を見ながら自分の気持ちを石に置き換えて選び、また次の絵を見る。展覧会を見終わったらロビーで石を見ながら絵を思い出す。直接絵と対するのはなく、間にひとつ物を通して絵に対してのときの自分の感覚をよみがえらせる。キュッパ展から「Such Such Such」につながって、「Such Such Such」というアート・コミュニケーション作品ができました。

稲庭 キュッパ展よりなかなか高度な活動ですね。たしかに、石とか物があることで、その物が自分が絵を見るときに伴走者になってくれて、自分の思考を回しやすくなるっていうのは、おもしろいですよね。

日比野 絵が苦手な人がいるから絵を描かなくなる。自分の気持ちを石ころなどの物に当てはめてみることや、紙と鉛筆じゃなくて、ちぎり絵だったりしたら、上手い下手がなく取り組みやすかったりする。

アート・コミュニケーション事業のこれから

稲庭 こうした展開がある中で、改めてこの5年間を振り返って、当初イメージしていたこととの違いはありますか？ 最初は、日比野さんからワークショップを常時行ってワークショップ研究もしていくような環境を作る連携ができないう、みたいなお話をいただいて。それで、打合せのときにこちらからの提案で「100人で

作る美術館」というプランを提案したら、それおもしろいねって言ってくださって、とびらプロジェクトになっていきました。

日比野 ワークショップって、そのときの集まったメンバーでなにしようか、どうなるのか、やってみようとか、時には今日うまくいかなかったねって、うろろろするもの。技法修得が目的の講座でなく、ワークショップみたいな状況をどう循環よくできるのか、ということと、「とびらプロジェクト」が生まれてきたことはつながっていて、輩出した人たちが地域で活躍できるといいよねっていうイメージがあった。当初イメージしていたように動いている部分もあるんだけど、5年経って、美術館や藝大という教育機関の役割自体も変わっていくというのは、始めた当初はそこまで想像できてはなかったね。教育機関も「とびらプロジェクト」と近い流れになっていく方向にもある。都美だけでなく全国の美術館全体もアート・コミュニケーションの流れが出てきているという実感はありますね。

稲庭 最初とびらの募集人数を決めるときに、私はどんなに多くても最大50名って思ってたんですね。でも日比野さんが「50人少ないよ」「そのうちサッカー会場でウェーブができるくらいに人が増えていくんだよ」っておっしゃって。もうそのスケールにびっくりして。神奈川から来た私は、東京みたいな大都市だとそういうダイナミックさが求められるんだなと思いました。今でもサッカー場の観客のウェーブの話はすごい印象に残っています。

日比野 一対一の丁寧なコミュニケーションも大切だけど、スケール感があることも大切だね。これからはアート・コミュニケーションには、グローバルな展開も必要だと思う。地域を大事にする、上野の杜でやる、One to Oneで人を大事にしているってことは、閉ざされ感もある。アート・コミュニケーションを通して、身近なキーワードで世界につながるんだっていうような

打ち出しが必要だよ。

稲庭 たしかに最近、海外からの視察もあったり、対応していく必要も感じているんですが、なかなかそこまでできていません。

日比野 全国各地のリニューアルする美術館とか文化センターから多くの視察が来ている都美の役割としては、ここでのスキルをどう発信していくのかということが大切。美術館の仕事がこれまでのように館の中で収まるのではなく展開されると、ますますアート・コミュニケーションというものが必要になってくるし、今や現代美術の中ではアート・コミュニケーションは欠かせない要素になっているからね。

稲庭 キュッパ展はミュージアム系の方に好評だったのですが、現代美術の文脈ではあまり反応を得られなかった感触があります。背景にあるとびらプロジェクトは、実はソーシャリー・エンゲイジド・アートに近い活動だとは思っているのですが。

日比野 アート・コミュニケーション事業が歴史上の一つの大きなタクトになっているのは間違いないのだけど、現代美術の中でどのように捉えられるかは、続けていかないと今の時点では見えにくいんじゃないかな。未来にしか新たな美術の流れは浮かびあがらないし、そういうときにこのドキュメントのようなアーカイヴはとても重要だよ。かつて都美の現代美術のコレクションが、東京都現代美術館のコレクションになって、今度は都美には新しいアート・コミュニケーションという事業が生まれたように、ここ都美からまた新しい現代美術の動きが生まれる拠点になっていく可能性がある。上野の杜の中にあって、アート・コミュニケーションの潮流を作った核として大事な事業、これからも連携して頑張りましょう。

稲庭 はい、頑張ります(笑)。今日はありがとうございました。



対談が行われた風の強い日、東京都美術館のエスplanードにて

第5回日本展示学会賞 作品賞受賞！

Winner of the Fifth Japan Society for Exhibition
Studies Best Exhibition Award (for 2013-2015)!

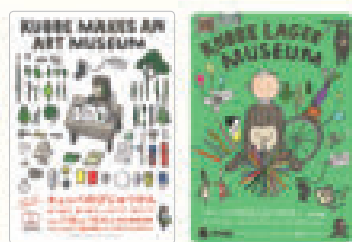
「キュッパのびじゅつかん」展は第5回日本展示学会賞作品賞を受賞しました。日本展示学会は国立民族学博物館の梅棹忠夫館長を会長に1982年に設立された学会で、その学会が審査する作品賞は「展示で社会的・文化的見地からもきわめて高い水準が認められ、芸術・技術の総合的発展に寄与する、優れた展示について顕彰する賞」。第5回は2013年から2015年間に完成し公開された展示から選ばれ、中でも委員による投票の際「キュッパのびじゅつかん」展は得票数が最も多い受賞であったとのこと。観に来てくださった方含め、この展覧会に関わってくださった全ての方によって出来上がった展覧会でこのような賞をいただき、皆様に深く感謝申し上げます。



資料

Exhibition Data

※下記に加えてポスター(B2)を制作した



B6カード(表・裏)



うちわ型チラン(表・裏)



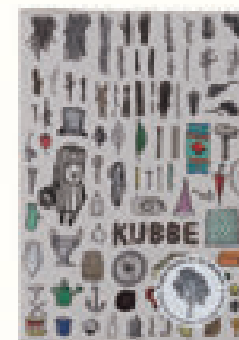
A4チラン(表・裏)



特設ウェブサイト <http://kubbe.tobikan.jp/>



広報用動画2種



外箱



カタログ



ポストカード2種



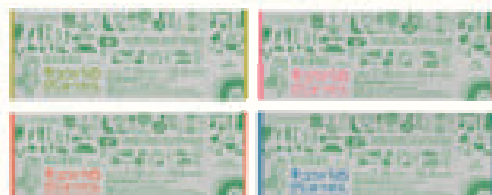
カタログセット「キュッパのびじゅつかん SPECIAL BOX」



キュッパの上野公園マップ



開会式・特別内覧会・レセプション招待状



チケット



正門バナー



ロビー階正面入口前のティピー型サイン



展示室入口サイン



展示室内サイン

オーシル・カンスタ・ヨンセン | Åshild Kanstad Johnsen

1978年ノルウェー、ベルゲン生まれ。ベルゲン国立芸術大学でデザインとビジュアルコミュニケーションを学ぶ。2011年、デビュー作である『キュッパのはくぶつかん』(原題:KUBBE LAGER MUSEUM、日本での翻訳本は2012年福音館書店・刊)で「今年のもっとも美しい本賞」(ノルウェー・ビジュアルコミュニケーション協会主催)銀賞受賞。2014年、「キュッパの影絵劇場」(原題:KUBBE LAGER SKYGETEATER)で「今年のもっとも美しいデジタルブック賞」(ノルウェー・ビジュアルコミュニケーション協会主催)金賞受賞。また、同年日本で2冊目の絵本『キュッパのおんがくかい』(原題:KUBBE LAGER SPETAKKEL)を福音館書店より刊行。

栗田宏一 | Koichi Kurita

1962年山梨県生まれ。「世界の多様性」をテーマに、足もとの土のありのままの美しさ、尊さを伝える作品を発表している。著書に、『KŌICHI KURITA』(LIENART / フランス)、『土の色って、どんな色?』(福音館書店)、『土のコレクション』(フレール館)など。東京都現代美術館や越後妻有里山現代美術館[キナール]にコレクションがある。
ブログ「SOIL LIBRALY II」<http://soillog2.exblog.jp>

岩田とも子 | Tomoko Iwata

1983年神奈川県生まれ。2008年東京藝術大学大学院美術研究科修了。身近な自然物の観察・採集から宇宙的なサイクルを体感するような制作をするアーティスト。発表形態は多様で2014年に香川県粟島ではじめた自然物を採集するプロジェクト「粟島自然観察船」、2016年に六本木アートナイトにて公園で発表した参加型インスタレーション作品「地球の植木鉢—もうひとつの地面のはじまり—」など。その他、自然学校の講師と共同で森の中で子どもワークショップを定期的に行う。生き物に対する素朴な視点、そこから始まる学びと表現を大切にしている。
ウェブサイト <http://shizenkansatsu.net/>

日比野克彦 | Katsuhiko Hibino

1958年岐阜県生まれ。1980年代、ダンボールを素材にした作品や時代を映す作風で注目され、1986年シドニー・ビエンナーレ、1995年ヴェネチア・ビエンナーレに出品。近年では地域の人々と制作を行いながら、受け手の力に焦点を当てたプロジェクトを展開している。2014年より異なる背景を持った人たちの交流をはかるアートプログラム「TURN」を監修し、東京都美術館「キュッパのびじゅつかん」展出品などで平成27年度芸術選奨文部科学大臣賞(芸術振興部門)受賞。東京藝術大学美術学部長 先端芸術表現科教授、岐阜県美術館館長、日本サッカー協会社会貢献委員会委員長。

アラン・ケイン | Alan Kane

1961年英国ノッティンガム生まれ。作り手側であるアーティストとその作品を見る側の人々との境界をあいまいにすることに関心を持ち、特に高尚な芸術と呼ばれるようなものと、より一般的な文化的活動の境界とはなにか?といったことを問いかける作品を制作している。2013年にイギリス Ancient and Modern で個展「Punk Shop」を開催。

小山田 徹 | Toru Koyamada

1961年鹿児島県生まれ。京都市立芸術大学日本画科卒業。1984年に結成した「ダムタイプ」の活動と並行して90年代からさまざまな共有空間の開発を始め、コミュニティセンター「アートスケープ」「ウィークエンドカフェ」などの企画運営を行う。近年は東日本大震災後に宮城県女川町にて住民や建築家らと結成した「対話工房」のメンバーとして、コミュニティの再生に携わる。京都市立芸術大学教授。

出品リスト | List of Exhibits

※出品リストは、展覧会場における展示順に作家またはコレクションごとに記した

※作品の情報は、作品名、サイズ(可変の場合は未表記、映像の場合は尺)、制作年、所蔵先の順に記した

※コレクション資料の情報は、資料名、サイズ(W×D×H,単位はmm)の順に記し、見出しのコレクション名については展覧会キャプションに準じた

オーシル・カンスタ ・ヨンセン	匙 140×500×130	木椀 180×170×78	明治43年の日英博覧会に 出品された土壌標本陳列台	土人形(鹿) 16×26×20	牛人形 28×63×48
絵本『キュッパのはくぶつかん』 映像 12分5秒	衣装箱 470×460×260	台秤 260×140×290	クランツ社製 岩石薄片標本と解説書	土人形(鹿) 10×27×26	東海道五十三次双六(箱入り) 72×110×11
welcome 2015年	木箱 170×300×150	木じゃく 170×220×74	各種樹木の炭の標本(68種類)	土人形(鹿) 15×28×21	張り子人形(起き上がり小法師) 39×51×56
ノルウェー収集資料 コレクション 国立民族学博物館	アイロン 170×51×130	宮澤賢治採取の石 岩手大学農学部附属 農業教育資料館	木村兼葎堂貝石標本 大阪市立自然史博物館	土人形(鹿) 12×26×22	張り子人形(起き上がり小法師) 42×34×55
水入れ 260×170×300	アイロン 150×84×99	末野 絹雲母片岩 標本	貝類標本 420×270×770	土人形(鹿) 12×28×22	張り子人形(起き上がり小法師) 38×40×54
食料入れ箱(蓋付き) 530×380×480	きざみ庖丁 360×230×37	波久礼 緑泥片岩 標本	奇石標本 260×365×288	玩具(雉子車) 110×200×70	土人形(住吉踊り) 32×38×70
糸車 1100×600×990	コーヒー沸し用 やかん 250×190×210	大古界ミカバ輝岩 標本	アチック・ミュージアム ・コレクション 国立民族学博物館	人形(マッチ箱入り) 52×35×16	土人形(住吉踊り) 43×45×73
靴屋用 椅子 390×490×840	賛美歌入れ用 木箱 100×140×72	日影森 蛇灰岩 標本	八戸馬人形 51×130×190	手向山八幡宮板馬 82×220×150	土人形(住吉踊り) 62×45×79
コーヒー沸し用 やかん(足付き) 330×240×260	木匙 43×150×35	「I-3」蛇紋岩 標本	馬人形 86×160×150	張り子人形(目無し達磨) 190×180×240	土人形(住吉踊り) 46×52×72
銅鍋(足付き) 150×330×170	木匙 49×150×39	「I-7」はんれい岩 標本	張り子人形(花巻馬) 65×140×120	張り子人形(お福達磨) 120×120×190	張り子人形(鹿) 33×100×110
銅鍋(足付き) 140×300×160	角匙 55×160×43	「I-15」閃緑岩 標本	土人形(鹿) 15×27×27	張り子人形(お福達磨) 140×140×190	張り子人形(鹿) 47×98×90
コーヒー沸し用 やかん 200×280×250	木椀 190×200×91	「IV-39」かんらん岩 標本	土人形(鹿) 15×29×27	張り子人形(お福達磨) 64×56×90	水写真(箱入り) 49×38×14
鋏 230×100×25	酒貯蔵用 樽 160×160×220	イギリス海岸で採集した クルミの化石	土人形(鹿) 14×29×19	張り子人形(恵比須大黒達磨) 150×150×190	銀行遊び 65×160×1×2点、69×160×1×1点、 66×160×1×1点
砂糖鋏 95×210×10	木匙 170×170×75	イギリス海岸で採集した クルミの化石のラベル	土人形(鹿) 12×29×24	張り子人形(達磨) 69×61×91	忍術合せ(箱入り) 40×97×24
砂糖鋏 49×180×10	コップ(蓋付き) 81×81×170	鉬物分析器具	土人形(鹿) 10×29×29	土人形(犬) 42×76×46	
	乳鉢(乳棒付き) 110×110×140	クリノメーター			
		岩石鉬物採集用鉄槌(ハンマー)			
		ルーペ			

電車遊び
49×140×1

じゃんけん紙
53×34×9

玩具(汽車の切符)
56×31×31

玩具(汽車の切符)
56×34×12

電車型呼び子
28×63×6

磁石
45×92×8

磨り絵
53×95×1

磨り絵
52×95×1

仮面(兎)
130×220×52

仮面(おかめ)
120×180×46

仮面(馬鹿)
130×170×50

仮面(猩猩)
130×180×58

長谷寺 魔除面
110×170×54

土人形(猫)
58×59×90

張り子人形(金太郎)
29×51×52

土人形(犍牛)
100×45×74

虎人形
68×37×60

虎人形
54×32×54

土人形(鼠)
66×32×23

彫像(鸞)
27×25×48

笹野彫 百姓
29×28×110

笹野彫 鶏
27×49×85, 20×30×54

けづりかけ龍(郷土玩具)
27×100×30

笹野彫 夷大黒
48×47×130

笹野彫 夷大黒
53×39×120

雉子車
85×150×88

雉子車
96×260×110

ウヅラ車
76×130×100

堤焼 猫人形
55×38×57

人形(兎)
38×120×81

張り子人形(玉兎)
88×81×81

土人形(猪)
42×110×57

瀬戸焼 睦蛇
45×39×37

瀬戸焼 睦蛇
40×41×32

木彫 鸞人形
62×62×69

木彫 ウソ人形
20×22×57

木彫 ウソ人形
71×60×180

鳥人形
22×78×56

鳥人形
20×81×55

張り子人形(達磨)(箱付き)
21×21×26

張り子人形(女達磨)
37×37×51

張り子人形(起き上がり小法師)
15×15×34

馬車(土製)
97×37×50

軽業人形車(土製)
48×72×49

能の黒翁面
120×240×52

仮面(鬼)
130×180×54

仮面(女狐)
110×170×67

いろはガルト
92×150×28

水写真
49×40×10

眼鏡
100×110×54

マスク
160×85×21

眼鏡
110×37×9

押しゴマ(1セット)
140×110×21

張り子人形(達磨)
74×78×130

呉服屋(模型)
340×110×220

塩吹き鯨人形(車付き)
310×300×610

錦帯橋組立玩具
170×130×54

張り子人形(目無し達磨)
17×15×34

仮面(狐)
130×180×67

張り子人形(猫達磨)
140×130×200

仮面(馬鹿)
150×180×64

獅子人形
120×190×150

張り子人形(犬車)
66×87×89

人形(虎)
35×100×35

土人形(猿)
28×27×39

土人形(達磨)
86×82×79

人形(鸞)
13×17×52

人形(鯨の潮吹き)
150×260×120

人形(象)
92×180×170

人形(牛)
91×160×180

雉子車
98×190×92

火薬入れ
74×110×42

火薬入れ
94×180×49

火薬入れ
140×110×21

墨壺コレクション
竹中大工道具館

墨壺(A112003)
200×50×72

墨壺(A112004)
182×63×90

墨壺(A112005)
223×88×87

墨壺(A112007)
147×78×46

墨壺(A112008)
259×118×104

墨壺(A112010)
245×94×84

墨壺(A112011)
223×87×104

墨壺(A112012)
197×67×78

墨壺(A112014)
235×51×87

墨壺(A112022)
103×44×49

墨壺(A112030)
193×133×109

墨壺(A112032)
166×116×100

墨壺(A112033)
182×120×98

墨壺(A112044)
238×65×86

墨壺(A112045)
243×83×80

墨壺(A112056)
247×91×85

墨壺(A112058)
232×151×108

墨壺(A112059)
204×51×100

墨壺(A112060)
203×161×99

墨壺(A112061)
245×124×102

墨壺(A112062)
216×148×113

墨壺(A112068)
359×86×110

墨壺(A112070)
171×122×108

墨壺(A112071)
198×130×103

墨壺(A112075)
173×143×120

墨壺(A112076)
145×120×123

墨壺(A112078)
235×73×99

墨壺(A112080)
172×126×73

墨壺(A112081)
184×143×101

墨壺(A112082)
168×120×122

種子と果実の標本・
キノコの標本
大阪市立自然史博物館

フタバガキ属の一種
熱帯のドングリ
アフエツェリア
ツノゴマ
ナツボダイジュ
アオギリ
アメリカオニアザミ
ユリノキ
ヨウシュチョウセンアサガオ
ゴバンノアシ
ミフクラギ
ハス
ヒメビシ
フジ
パラゴムノキ
ノウゼンカズラ
モダマ
イガオナモミ
タビビトノキ
トウアズキの仲間
ナンバンサイカチ
トウビシ
フウセントウワタ
ダイオウマツ
イボテングタケ
コオニイグチ
ショウゲンジ
キヒダタケ

アメリカウラベニイロガワリ
ハラタケ属の一種
スッポンタケ
オクヤマニガイグチ
カレバキツネタケ
ツバキキンカクチャワンタケ
マゴジャクシ
カレバハツ
モエギアミアシイグチ
ベニタケ属の一種
トガリアミガサタケ
ウコンハツ
アイタケ
チチアワタケ
ニセアシベニイグチ
キクバナイグチ
ホオベニタケ
ムラサキヤマドリタケ
タンボタケモドキ
イボセイヨウショウロ
セミタケ
ヘビキノコモドキ
ホコリタケ
オオシロカラカサタケ
コウボウフデ
キイレッツトリモチ
カエンタケ
ナラタケモドキ
ウラスジチャワンタケ

山本コレクション
世界のタイル博物館
(INAX ライブミュージアム)

多彩草花文手書きタイル
152×154×14
多彩草花文手書きタイル
154×154×10
多彩草花文手書きタイル
151×153×10
多彩草花文手書きタイル
157×157×12
単彩銅板転写タイル
154×153×10
単彩銅板転写タイル
152×152×14
湿式象嵌タイル
150×150×22
湿式象嵌タイル
110×110×22
藍彩動物文タイル
131×131×8
藍彩動物文タイル
130×130×12
藍彩動物文タイル
128×128×11
藍彩チューリップ文タイル
130×130×13
多彩草花文タイル
132×130×14
染付紋章文磁器タイル
70×70×9
染付紋章文磁器タイル
70×70×9
染付紋章文磁器タイル
70×70×9

多彩幾何文タイル
67×68×14
白地藍緑彩幾何文タイル
67×69×8
白地多彩草花文タイル
107×107×14
白地多彩草花文タイル
114×112×15
白地多彩花鳥文タイル
188×188×13
白地多彩草花文タイル
144×141×15
印花花文志野釉敷瓦
185×187×19
瀬戸本業染付花文敷瓦
153×154×14

栗田宏一
SOIL LIBRARY / TOKAI
2015年
SOIL LIBRARY / JAPAN
2015年

岩田とも子
ひろってはたどるような部屋
2015年
山宇宙望遠鏡標本
615×615×60
2011年
佐久市立近代美術館
※《ひろってはたどるような部屋》
の中に展示

日比野克彦
bigdatana—
たなはものすみか
2015年

ソコソコ想像所—上野の杜
2015年

アラン・ケイン
Home of Orphaned Dishes
(忘れられた器たちの棲み家)
2011年
ブリティッシュカウンシル

小山田 徹
浮遊博物館 2015
2015年

アート・コミュニケーション事業ドキュメント
「キュッパのびじゅつかん」展から

企画・編集

東京都美術館

執筆

稲庭彩和子、石丸郁乃、熊谷香寿美、河野佑美、佐伯胖、鈴木廣之、藤原徹平、丸川雄三、米津いつか
(五十音順)

制作・編集

米津いつか(一般社団法人ノマドプロダクション)

翻訳

ライアン・クック

田村かのこ

デザイン

栗谷川舞(STUBBIE DESIGN)

イラスト

オーシル・カンスタ・ヨンセン © Åshild Kanstad Johnsen/ TMS

写真

加藤健(表紙, pp.20-27, 32-33, 36-37, 40-41, 44-45, 50-51, 53-55, 58-59, 62-75, 78-79, 82上, 83, 84左下, 86上, 87-89, 91下, 93中, 94-99, 101-109, 133右下, 146左下, 156左下・右下, 157左下・右下, 182-183)、加藤甫(pp.172, 174, 175, 177)、中島佑輔(表2)、米津いつか(pp.80-81, 82左下, 84-85上, 84右下, 85, 86下, 91上, 116上, 117上, 124-129, 131, 133上・左下・中下, 144-145, 155上, 162上, 表3)

印刷

山田写真製版所

発行

東京都美術館(公益財団法人 東京都歴史文化財団)

〒110-0007 東京都台東区上野公園8-36

電話 03-3823-6921

2017年3月30日発行

©2017 Tokyo Metropolitan Art Museum